# 第４回特色ある県立高校づくり懇談会

# 配布資料

（最終版）

# 第４回特色ある県立高校づくり懇談会
# 論点

## テーマ　特色化、魅力化について ②

・魅力ある選択肢を拡大させるために、

　どのような高校が必要か

・県境校や中山間地校の存続には、

　どんな特色化が必要か

第５回 論点の予定

テーマ　懇談会での議論のまとめ

# 長野県の高校の現状と、特色化・魅力化に関する論点

## 県立高校に対する様々な声

### 1　入口の多様な選択肢の拡大

・多様な進路や個性に対応した高校の選択肢を増やしてほしい
・在学中に専門資格を取得できる高校がほしい
・東京大学や医学部医学科などへの入学に重点を置いた高校がほしい
・不登校の生徒たちへの学びの場を充実させてほしい
・これからの時代に活躍できる力を身に付けられるようにしてほしい
・長野県らしく自然を生かした、また郷土愛を育める学びにしてほしい
・職業科でも大学進学の道を保障する仕組みがほしい
・より高度な専門教育を受けたい
・文化祭や修学旅行など、友達と充実した青春時代を過ごせる高校がほしい

### 2　県境校や中山間地校の課題

・他県の高校へ地元の中学生が流出している
・再編基準該当に伴う高校再編により地元から高校がなくなり、地域衰退に繋がる

## 関連データ

### 公立高校の学科別学校数比較（Ｒ４）

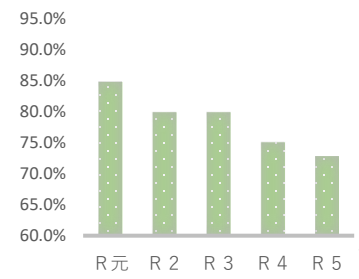
| （単位：学校数） | 長野県 | 全国平均 |
|---|---|---|
| 普通 | 64 | 51.26 |
| 農業 | 9 | 6.34 |
| 工業 | 11 | 9.23 |
| 商業 | 10 | 9.47 |
| 水産 | 0 | 0.89 |
| 家庭 | 3 | 3.62 |
| 看護 | 0 | 0.62 |
| 情報 | 0 | 0.45 |
| 福祉 | 0 | 1.23 |
| その他の学科※ | 13 | 9.62 |
| 総合学科 | 6 | 7.51 |

※県内のその他の学科：理数、体育、音楽、探究、国際教養など

（学校基本調査報告書より）

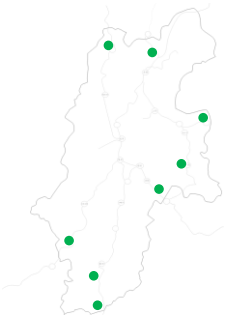
### 県境校の充足率

（入学者数/募集定員数）




（高校教育課調べ）

### 県境校の所在地



**長野県が推進したい県立高校での学び（これまでの議論を踏まえ）**

**どの学科でも生徒が希望する進路を叶えられ、**
**どんな社会でも活躍できる力を身に付けられる学び**

**探究を核とした学び　・　個別最適な学び　・　協働的な学び**

**第３回・第４回でみなさんに議論いただきたいこと**

**①　魅力ある選択肢を拡大させるために、どのような高校が必要か**
**②　県境校や中山間地校の存続には、どんな特色化が必要か**

## 特色化のイメージ

### 新たな学科の設置

**新たな学科は必要？**
**デジタル系学科？福祉学科？**
**その他にどんな学科が必要？**

### 県境校

**特色化の方策は？**
**県外への流出を止めるには？**
**県外からの全国募集は？**

〇県内の高校（５年平均）
・県境校充足率は75.9％
・県外進学者は年403人

### 地域連携

**デュアルシステム？**
**連携コーディネーターは？**
**高大連携？**

### 中高一貫校

**さらなる併設型は必要？**
（進学に有利？６年間環境変化がないのはどうなの？）
**市町村立との連携型は？**

〇県内の高校
・併設２校（全国平均1.9校）
・連携なし（全国平均1.6校）

### 個別最適な学び

**単位制の導入は？**
**インクルーシブな教育は？**
**ＩＣＴの活用？**

### 国際的な学び

**留学や海外生徒の受入は？**
**英語で学ぶ学校？**
**海外大学への進学は？**

〇国際教養科のある県立高校
・３校
〇バカロレア認定校
・県内２校（私立のみ）
・全国公立11校

### 全国募集

**全国や海外から募集？**
**どうすれば生徒が集まる？**

〇県内の実施高校（２校）
・白馬高校（国際観光科）
・飯山高校（スポーツ科学科）

### 大学進学

**特定の大学への進学支援を**
**特色とした高校は、**
**長野県に必要？**

〇県内の高校（Ｒ４）
・大学進学率　46.4％

### 職業系高校

**より高度な専門教育のために、**
**県立高専は必要？**

〇高専の現状
・県内１校（国立、工業科）
・公立は３校のみ

### その他

**高校にどんな特色**
**（授業、行事、部活動等）**
**があれば、**
**生徒たちにとって**
**充実した高校生活に**
**なるだろうか？**

# 進路先から見た県内の県立高校の状況（R4）

※大学短大進学率には浪人を含む、家居等は除く

| 区分 | | 第１通学区 | | | | 第２通学区 | | | | 第３通学区 | | | | 第４通学区 | | | | 全県 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 学校数 | 大学短大進学率平均 | 専修学校等進学率平均 | 就職率平均 | 学校数 | 大学短大進学率平均 | 専修学校等進学率平均 | 就職率平均 | 学校数 | 大学短大進学率平均 | 専修学校等進学率平均 | 就職率平均 | 学校数 | 大学短大進学率平均 | 専修学校等進学率平均 | 就職率平均 | 学校数 | 大学短大進学率平均 | 専修学校等進学率平均 | 就職率平均 |
| 普通科・普通科系専門学科（分校除く） | 大学等進学中心校（大学短大進学９割超） | 5校 | 96.2% | 2.7% | 0.7% | 3校 | 95.0% | 4.2% | 0.4% | 4校 | 93.8% | 4.3% | 1.3% | 3校 | 96.3% | 2.6% | 0.6% | 15校 | 95.3% | 3.5% | 0.8% |
| | 多様な進路選択校（専各等進学１割超） | 6校 | 63.2% | 29.8% | 5.7% | 6校 | 67.4% | 25.0% | 5.7% | 5校 | 69.8% | 23.1% | 6.1% | 5校 | 62.7% | 27.9% | 6.9% | 22校 | 65.8% | 26.5% | 6.1% |
| | 就職中心校（就職割合最多） | 2校 | 6.3% | 32.5% | 57.1% | 1校 | 24.6% | 26.2% | 47.7% | 5校 | 19.2% | 30.8% | 47.0% | 2校 | 17.6% | 34.1% | 45.6% | 10校 | 16.9% | 30.9% | 49.4% |
| 職業系専門科（普通科併設含む） | 農業科 | 3校 | 16.9% | 34.2% | 45.6% | 1校 | 15.2% | 41.0% | 42.9% | 3校 | 23.9% | 36.3% | 38.3% | 2校 | 27.9% | 40.0% | 30.0% | 9校 | 21.0% | 37.9% | 39.2% |
| | 工業科 | 2校 | 24.7% | 22.8% | 49.1% | 2校 | 13.7% | 33.8% | 51.1% | 3校 | 25.7% | 26.3% | 47.6% | 3校 | 21.6% | 28.7% | 46.6% | 10校 | 21.4% | 27.9% | 48.6% |
| | 商業科 | 3校 | 38.3% | 29.5% | 30.3% | 2校 | 39.8% | 37.6% | 18.3% | 4校 | 20.2% | 38.0% | 40.4% | 1校 | 30.5% | 38.1% | 27.6% | 10校 | 32.2% | 35.8% | 29.2% |
| | 家庭科 | 1校 | 15.2% | 45.5% | 33.3% | 1校 | 37.2% | 42.3% | 19.2% | 1校 | 10.0% | 55.0% | 35.0% | - | - | - | - | 3校 | 20.8% | 47.6% | 29.2% |
| 総合学科 | | 1校 | 18.9% | 43.2% | 35.1% | 2校 | 26.4% | 36.8% | 34.0% | - | - | - | - | 2校 | 36.8% | 43.4% | 17.8% | 5校 | 27.4% | 41.1% | 29.0% |
| 多部制 | | - | - | - | - | 1校 | 12.4% | 40.0% | 44.8% | 1校 | 17.8% | 32.2% | 36.7% | 1校 | 10.4% | 29.9% | 31.3% | 3校 | 13.5% | 34.0% | 37.6% |

# 資料一覧
（第４回特色ある県立高校づくり懇談会）


１　新たな学科
　　新たな学科の設置について　・・・6

２　国際的な学び
（１）国際的な学びについて　・・・7
（２）国際バカロレアについて　・・・8

３　県境校
　　県境に所在する高校について　・・・9

４　全国募集
　　全国募集について　・・・10

５　地域連携
（１）高校におけるデュアルシステムについて　・・・11
（２）学校と社会をつなぐ連携コーディネーターについて　・・・12
（３）高大連携について　・・・13

６　大学進学
　　大学進学を切り口とした特色化について　・・・14

７　中高一貫校
　　中高一貫校について　・・・15

８　職業系高校
　　職業系高校について　・・・16

９　個別最適な学び
（１）単位制について　・・・17
（２）高校におけるインクルーシブな教育の充実について　・・・18
（３）ＩＣＴを活用した教育について　・・・19

10　これまでのまとめ（第１回～第３回）　・・・20

11　市町村・市町村教育委員会アンケートについて　・・・30

12　高校再編に関する考え方及び基準等について　・・・54

# 新たな学科の設置について

**概要**

現在長野県立高校には、普通科、農業科、工業科、商業科、家庭科、総合学科、その他の学科（探究科、理数科、音楽科など）が設置されている。

学科設置という切り口から特色化を考えたとき、これからの時代に必要な学びや、地域からの声に対応するために、新たな学科を設置することは必要だろうか。

**例示１　デジタル系学科**

**（１）情報系学科の県内及び全国の設置状況（Ｒ５）**

**県内の設置状況**

・なし（私立含む）

・高校再編により新たに設置を予定の総合技術高校には、ＤＸに対応するデジタル系新学科を設置し、この新学科を結節点として各専門学科（農・工・商）の学びを融合させていくことを構想。

**全国の設置状況**（公立高校）

15 都府県　全日制 17 校　定時制２校

| | 単置 | 併設 | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | 普通 | 工業 | 商業 | その他 |
| 全日 | 0 | 3 | 1 | 2 | 11 |
| 定時 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 |

（全国専門学科情報科高等学校長会会員校数）

**（２）設置（導入）にあたっての課題**

・これから求められる情報に関する学びの把握と、それに対する教育課程の構想、構築

・専門知識を持った教員の確保

**例示２　福祉に関する学科（介護福祉士資格の取得に関して）**

**（１）概要**

「福祉系高等学校」に指定された高校では、介護福祉士※1 の国家試験の受験資格が得られる。福祉系高等学校とは、カリキュラム、教員、施設・設備、実習施設など、介護福祉士養成課程の基準を満たす高等学校及び中等教育学校として、文部科学大臣及び厚生労働大臣が指定した学校のこと。

※1 介護に係る一定の知識や技能を習得していることを証明する国家資格。福祉業界からは、専門的知識を備えた即戦力がほしいとの要望が寄せられている。

**（２）県内と全国の状況（Ｒ４）**

（高校教育課調べ）

| | 公立 | 私立 |
|---|---|---|
| 福祉系高等学校（修了時に介護福祉士試験の受験資格を取得できる） | 0 校<br>（全国）都道府県立 66 校、市立１校 | 2 校<br>（エクセラン※3<br>松本国際（Ｒ４～募集停止））<br>（全国）51 校 |
| 福祉を学べる高校※2（系列・コース） | 10 校<br>（上田千曲、中野立志館、丸子修学館、東御清翔、蓼科、茅野、高遠、阿南、塩尻志学館、梓川） | 0 校 |

※2 福祉を学べる高校においても「介護職員初任者研修」や「社会福祉・介護福祉検定２級」などの取得は可能

※3 エクセラン高等学校ではＲ４卒業生 13 名が介護福祉士国家資格合格。

**（３）福祉系高等学校設置にあたっての課題**

・必要科目 53 単位※4 以上（うち介護実習 13 単位は入所・通所含めた施設実習であり、３年間で 50 分授業 416 回分）履修することが必要で、３年間で必要単位を取得するには、他の学科に比べ生徒や教員への負担が大きくなる教育課程を組まなければならない。　※4　1 単位＝50 分×35 週＝1,750 分

・資格取得に指定された単位取得は、ひとつの学校の教育課程の中で完結させなければならず、高校で取得した単位は、上級学校や高校専攻科に引き継ぐことはできない。

・施設や設備、実習施設などの整備が求められる。

# 国際的な学びについて

## １　概要

長野県立高校では、国際的な学びの拠点となる国際教養科を設置している。

英語コミュニケーション力を高めるだけでなく、第２外国語の授業や様々な交流行事、海外研修旅行を通じて、日本の文化・伝統および異文化に対する理解を深め、豊かな国際感覚を磨くとともに、国際社会で活躍するための行動力や発信力を身に付けることを目的とする。

## ２　国際的な学び（国際教養科）の特長

・コミュニケーション力が高く積極的な生徒、多様な背景を持つ生徒が集まりやすく、海外帰国生や短期留学生を受け入れやすい環境が整っている。

・科全体として、英語の資格取得、スピーチ大会やディベート大会等に取り組みやすい。

・第２外国語の履修により、一層グローバルな視点の醸成がなされる。

・外国語指導助手（ALT）2 名が配置されていることにより、英語の 4 技能のうち特にスピーキング技能の向上に効果的。

・外国にルーツを持つ多様な背景を持つ生徒たちの入学により、生徒たちの多様性の理解や、協働的に物事に取り組む姿勢が養われている。

・国際交流が盛んであるという高校の明確なイメージに繋がっている。

## ３　県内の事例

| 学校名<br>（設置年） | 第 2 外国語 | 海外研修旅行　等 |
|---|---|---|
| 長野西高校<br>（1999 年） | ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語 | オーストラリア 14 日間 64 名（R4）<br>海外教育機関への進学 2 名（R3） |
| 上田染谷丘高校<br>（2001 年） | フランス語、スペイン語、中国語、韓国語 | 台湾・台北 9 日間 15 名（R４）<br>フランス・アメリカ・ブラジル・カンボジア・マレーシア 各 1 名（R4） |
| 飯田風越高校<br>（2002 年） | フランス語、スペイン語、中国語、韓国語 | オーストラリア 14 日間 38 名（R4）<br>海外教育機関への進学 2 名（R4）、1 名（R3） |

※全県立学校の海外教育機関への進学実績　R4：15 名（大学（予科含）11 名、語学学校 4 名）

## ４　現状の課題

・多様な生徒が集まり進路選択も様々であるため、きめ細かな進路指導が求められる。

・海外研修旅行の経済的負担が大きい。

・理系科目を苦手とする生徒が多く、カリキュラムも文系に偏りやすい。

# 国際バカロレアについて

## 1　概要

国際バカロレア（IB）は、国際バカロレア機構（本部ジュネーブ）が提供する国際的な教育プログラムで、多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、探究心、知識、思いやりに富んだ若者の育成を目的とする。

高校レベルのディプロマ・プログラム（DP）は国際的に通用する大学入学資格（IB 資格）が取得可能であり、世界の大学入学者選抜で広く活用されている。

【IB が目指す 10 の学習者像】　（参考：文部科学省 IB 教育推進コンソーシアム）

inquirers 探究する人、knowledgeable 知識のある人、thinkers 考える人、
communicators コミュニケーションができる人、principled 信念をもつ人
open-minded 心を開く人、caring 思いやりのある人、risk-takers 挑戦する人
balanced バランスのとれた人、reflective 振り返りができる人

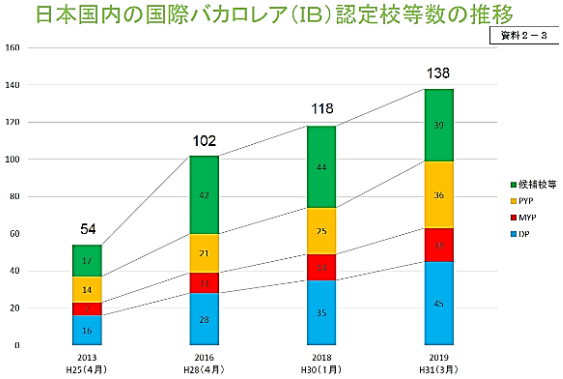
## 2　県内の状況・全国との比較

・県内　私立 2 校　公立なし
・全国　211 校（令和 5 年 6 月 30 日現在）

そのうち
・学校教育法第 1 条に規定されている学校　73 校
・ディプロマ・プログラム（DP）認定校　67 校
**・公立高等学校認定校（中等教育学校含む）11 校**

・世界　159 以上の国・地域、約 5,600 校

日本国内の国際バカロレア（IB）認定校等数の推移




（参考：文部科学省 IB 教育推進コンソーシアム事務局）

## 3　国際バカロレアのメリット・デメリット

（1）メリット
・世界中の大学入学資格が得られる。
・教科やコミュニティを超えて学習するなかで、リーダーシップが身に付く。
・探究型教育に力を入れており、課題解決力を身に付けることができる。

（2）デメリット
・授業内容が日本のカリキュラムと大きく異なることにより、日本の大学受験、特に一般入試において不利となるため、進路実現が困難となる場合がある。
・特に日本語 DP の場合、ＤＰの科目と日本の学習指導要領の科目との代替等の対応関係が文部科学省から示されてはいるが、科目数が多くなるため、生徒及び教員への負担が大きくなる。

## 4　県内の事例（未来の学校構築事業「国際的な教育プログラムを研究する高校」飯田風越高校）

（1）学習内容
・海外研修 14 日。多様な文化の理解と受容、留学、海外進学等に向けた特別講座の実施。
・外国語指導助手（ALT）2 名配置による少人数 TT 実施。海外からの留学生 1 名在籍。

（2）それによる成果
・「海外大学進学は自分でも可能」と考える生徒が 8 名から 23 名へと大幅に増加した。
・海外進学に対する生徒の興味・関心が高まり、つばさプロジェクト等の留学企画への応募が増加した。また、国際教養科在学の生徒 5 名程度が海外進学を希望している。

## 5　設置（導入）にあたっての課題

・経費負担の増
例）年会費 100 万円、定期評価訪問費 50 万円、論文チェック用ソフト 30 万円
　　＋　その他（人件費＋研修費＋施設整備費など）
・高度な内容を指導できる教員（日本人・外国人ともに）の確保及び研修
・一定数の入学生を確保できるか

# 県境に所在する高校について

## 1　現状と課題

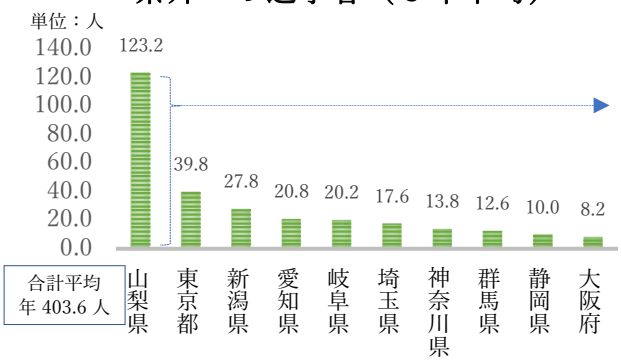
・県境校を含む中山間地校には、できる限り存続できるよう都市部校とは異なる再編基準を設けている。しかし、有効な施策を講じなければ、少子化による小規模化に拍車がかかり、再編基準該当に伴う高校再編により高校がなくなり、該当市町村の衰退に繋がりかねない。
・県境に近い地域では、他県の高校に流出している状況もある。
・県境校充足率は 75.9%と全日制高校平均 94.7%と比べ低い。
・中山間地校等の小規模校は、①生徒一人ひとりに目が届きやすく、きめ細かな支援が可能②地域との連携を活かした教育活動を行いやすく、地域の担い手を育成する等、地方創生、地域活性化の観点からも重要な役割を果たすことが可能。
・**このような利点や役割を活かして、どう特色化・魅力化を図っていくかが課題。**

## 2　県境にある高校の充足率

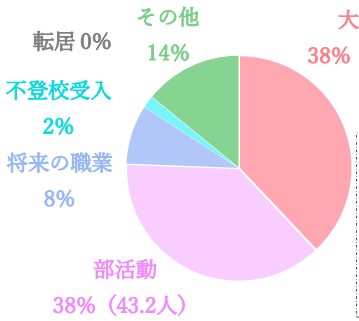
| 高校名 | 学科 | 令和３年度 | | | 令和４年度 | | | 令和５年度 | | | 平均 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 定数 | 入学 | | 定数 | 入学 | | 定数 | 入学 | 充足率 |
| 北部高校 | 普通 | 87.5% | 80 | 70 | 78.8% | 80 | 63 | 62.5% | 80 | 50 | 76.3% |
| 軽井沢高校 | 普通 | 93.8% | 80 | 75 | 101.3% | 80 | 81 | 95.0% | 80 | 76 | 96.7% |
| 小海高校 | 普通 | 67.5% | 80 | 54 | 51.3% | 80 | 41 | 57.5% | 80 | 46 | 58.8% |
| 富士見高校 | 普通 | 102.5% | 40 | 41 | 102.5% | 40 | 41 | 80.0% | 40 | 32 | 95.0% |
| | 農業科 | 100.0% | 40 | 40 | 102.5% | 40 | 41 | 100.0% | 40 | 40 | 100.8% |
| 阿智高校 | 普通 | 100.0% | 80 | 80 | 93.8% | 80 | 75 | 102.5% | 80 | 82 | 98.8% |
| 阿南高校 | 普通 | 85.0% | 80 | 68 | 56.3% | 80 | 45 | 58.8% | 80 | 47 | 66.7% |
| 蘇南高校 | 総合 | 43.8% | 80 | 35 | 61.3% | 80 | 49 | 48.8% | 80 | 39 | 51.3% |
| 白馬高校 | 普通 | 57.5% | 40 | 23 | 65.0% | 40 | 26 | 52.5% | 40 | 21 | 58.3% |
| | 国際観光 | 62.5% | 40 | 25 | 45.0% | 40 | 18 | 82.5% | 40 | 33 | 63.3% |
| 県境校平均 | | 79.8% | 640 | 511 | 75.0% | 640 | 480 | 72.8% | 640 | 466 | 75.9% |
| 全校平均 | | 94.8% | 14,000 | 13,278 | 94.8% | 14,120 | 13,390 | 94.5% | 13,960 | 13,197 | 94.7% |

## 3　長野県から県外への進学状況（私立含む）　H30～R４の５年間

### 県外への進学者（５年平均）




### 山梨県への進学理由内訳（5年平均）




大学進学のうち 72.9%（31.8 人）が北杜市立甲陵高校へ進学。当高校は募集定員に「長野県枠」を設定。入学者選抜後期日程では、長野県立と併願可能。

（※右のグラフは進学者のうち理由が把握できた生徒数分の数値のため、左の表とは若干数字が異なる。）

## 4　山梨県との県境となる諏訪地区（旧７区）の県外・区域外への流出の状況（Ｒ４）

| 区分 | 地区 | 諏訪地区（旧７区） | | 差 |
|---|---|---|---|---|
| | | 転入(A) | 転出(B) | (A-B) |
| **県外** | **山梨県** | **３人** | **80 人** | **△77 人** |
| 県内 | 上伊那方面（旧８区） | 99 人 | 10 人 | +89 人 |
| | 塩尻・松本方面（旧 11 区） | 115 人 | 61 人 | +54 人 |

※長野県では一部の県と結んでいる協定や慣例等により、隣接県の生徒を一定の条件の中で受け入れている。北杜市とは協定等の取り決めがない。

# 全国募集について

## １　概要

全国募集とは全国（長野県外）から生徒募集を行うことである。保護者の転住を伴う、もしくは保護者の居住する長野県に戻る入学志願は、現在も全校で認められており、県外からの志願であっても全国募集という定義からは外れる。また、県境隣接地域からの入学志願も除く。

## ２　県内の状況・全国との比較

**県内の状況**

①飯山高校　スポーツ科学科

出願資格　：スポーツ科学科に志願を強く希望し、かつ入寮する者

県外生定員：なし

学生寮　　：県立（学校が運営）

県外生徒率：Ｒ３　15.8%（6 人/38 人）
Ｒ４　21.6%（8 人/37 人）
Ｒ５　29.4%（10 人/34 人）

②白馬高校　国際観光科

出願資格　：国際観光科に志願を強く希望する者

県外生定員：なし

学生寮　　：白馬・小谷両村が設置し、白馬山麓事務組合が運営

県外生徒率：Ｒ３　31.2%（8 人/25 人）
Ｒ４　27.8%（5 人/18 人）
Ｒ５　30.3%（10 人/33 人）

**全国の状況**

①実施校　306 校（H30 文科省資料）
341 校（R2 宮城県教委資料）

②タイプ　・特色ある学科での募集
・特定の部活動による募集
・特に条件なし　など

③県外生定員　県により様々

## ３　全国募集のメリット

・多様な価値観を持つ生徒同士がふれあい、切磋琢磨できること
・新たな人間関係の構築と交流が拡大し、コミュニケーション力育成が期待できること
・県外生徒が、高校 3 年間を過ごす地域への愛着を持つこと

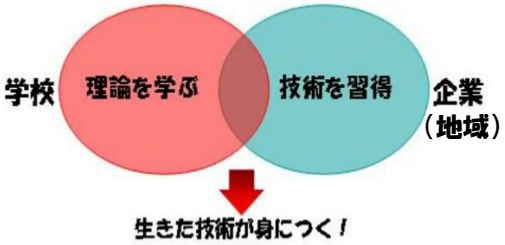
## ４　導入にあたっての課題

・募集の方法によっては、県内生徒の入学に影響が及ぶ可能性
・県外の学生を受け入れる学生寮等のあり方の検討
・学生寮等設置とする場合の、設置・維持に係る費用、運営に関する人的配置

# 高校におけるデュアルシステムについて

## １　概要

高校におけるデュアル（２つの）システムとは、学校と企業（地域）が協力して生徒を育成する職業教育である。３日間前後で実施するインターンシップよりも長期にわたり就業体験を行う中で、学習をより深めるとともに、企業が必要とする実践的な技能・技術を身に付けたり、職業観や社会観といった職業人としての資質を磨くことができる。




## ２　県内での取組事例（６校の実践）

**○池田工業高等学校　平成 18 年～（18 年目）**

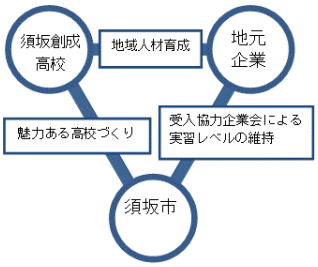
機械・電気学科、建築学科（３年希望生徒が実施）
科目「課題研究」にて単位認定
週１日（年 25 日間程度）

造業、建設業、農協、社会福祉協議会などの現場で、実践的な技術を身に付けることができる
・高齢者用電動・手動カートの設計・製作
・池工版デュアルシステム発電所（水車による小水力発電、高校による水利権取得）
・安曇野ちひろ美術館内の机や椅子の製作
・農業用機械の修理・メンテナンス
・福祉に関する実体験、高齢者との交流　　等

**○須坂創成高等学校　平成 27 年～（９年目）**

創造工学科（全生徒が実施）
３年時に学校設定科目「企業実習」にて単位認定

週１日（10 日間程度）




**１年次　地域の産業を知る**
地域の産業を調べたり、企業見学、企業の方のお話を聞くなど、地域の産業を知ることで、将来を見据えた専門学習へのモチベーションを高めることができます。

**２年次　地域の企業で就業体験**
３日～５日間の就業体験を２社で実施します。仕事や社会を知ることで、社会人として必要なスキルや職業の適性を考えることができます。

**３年次　地域の企業で実践的な実習**
１社で週１日（１０日間程度）の企業実習を実施します。工業人としての姿勢や実践的な技術・技術を身につけることができます。

**○軽井沢高等学校　平成 28 年～（８年目）**

普通科（3 年次選択科目にて希望生徒が実施）
学校設定科目「デュアル」にて単位認定
週１日（年 15 日間程度）

**○白馬高等学校　令和元年～（５年目）**

国際観光科（3 年次選択科目にて希望生徒が実施）
学校設定科目「観光Ⅰ」の増加単位にて単位認定
土日、長期休業中（年９日間程度）

**○小諸商業高等学校　令和２年～（４年目）**

商業科、会計システム科（3 年希望生徒が実施）
科目「課題研究」の一部として単位認定
週１日（年 15 日間程度）

**○茅野高等学校　令和５年～（１年目）**

普通科（２年生全員実施）
「総合的な探究の時間」にて単位認定
週１日（年 22 日間程度）

## ３　デュアルシステムの効果及び課題

＜効果＞

○実際に企業で、より実践的な技術・技能を身に付けることができる。
○社会人（職業人）としての意識をリアルに学ぶことができる。
○自分の適性を自覚し、進路決定に役立てることができる。（支援企業に就職する例もある。）

＜課題＞

■企業側の負担の問題。（材料や消耗品等の費用面、社員が生徒を指導する際の準備等）
■生徒が実習に参加してからのミスマッチの修正
■進学（専門学科以外）を希望する生徒に対する指導（モチベーション等）

# 学校と社会をつなぐ連携コーディネーターについて

## １　概　要

・生徒自らが問いを立て、多様な他者と協働して課題に取り組めるような学びの環境を整備するためには、学校内で学びを完結させるのではなく、学校を積極的に開き、社会とつながっていく仕掛けが必要である。その中心的な役割をもち、専門的に実践するのが連携コーディネーターである。

・社会と連携した学びの効果として

①個々の生徒のニーズに応じた探究学習のフィールドが広がり、学びがより深まる

②魅力的な大人に出会う機会が増加する

③地域の人々や産業界と連携を強めることで、地域の良さを確認し、卒業後も地元に貢献したいと考える若者が増える　　などが挙げられる。

【背景】

・「新学習指導要領」：地域の企業等との協働を前提とした探究学習の要請

・「第４次長野県教育振興基本計画」：個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実

“一人ひとりが主体的に学び他者と協働する学校をつくる”等　を位置付け

## ２　県内の状況

・Ｒ５年度、県内２校に連携コーディネーターをモデル的に先行配置するとともに、検討ワーキンググループを設置し、コーディネーターのあり方等を議論。

・具体的な内容

| | 池田工業高校 | 野沢北高校 |
|---|---|---|
| 業務内容 | 企業訪問・インターンシップ受入調整、職業研修の実施　等 | 探究活動支援、外部サポーターの発掘、コンソーシアムの立ち上げ　等 |
| 実績・効果 | ・就職でのミスマッチ解消<br>・地域と学校の一層の繋がり | ・生徒の問題発見能力の向上<br>・教員や生徒への地域資源の提供 |

## ３　連携コーディネーターの役割とその効果

・異動がある教員ではなく、各校のニーズに応じた連携コーディネーターを配置することで、各地域の特色を活かした持続可能な教育活動が行える。

・地域資源（人・もの・課題等）を掘り起こすことで、生徒は探究的な学びをより自分の課題として実践的に深めることができる。

・学校の魅力・特色を中学校や地域に常時発信したり、説明会を開催したりするなど、学校への理解を深める機会を増やすことで、入学希望者が増えることが期待できる。

## ４　配置にあたっての課題

・業務内容が曖昧とならないための、連携コーディネーターの配置目的や役割の明確化

・研修会実施などによる連携コーディネーターの質の担保と向上、適任者の確保

# 高大連携について

## 1　概要

高大連携とは高等学校と大学とが連携する取組のことである。高校生が大学の授業を受ける、大学の教員が高校で出前授業を行うといった、高校生が大学レベルの教育・研究に触れる機会を増やしたり、高校と大学の教員同士が交流し、ネットワークを構築したりすること等を目指す。

## 2　県内の状況

（1）各校の連携の状況（令和５年度学校経営概要による）

**大学と連携している県立高校（令和４年）**

| 項目 | 全日制 79 校 | | 定時制・通信制 23 校 | |
|---|---|---|---|---|
| | 校 | % | 校 | % |
| ①　連携協定を結んでいる | 34 | 43.0% | 5 | 21.7% |
| ②　教科・総合的な探究の時間 | 30 | 38.0% | 2 | 8.7% |
| ③　特別活動（学校行事・生徒会活動等） | 7 | 8.9% | 1 | 4.3% |
| ④　部活動 | 6 | 7.6% | | |
| ⑤　その他 | 7 | 8.9% | | |

※令和５年９月本課調査によると、信州大学と連携を実施している高校数は 44 校（53.7%、回答数 80 校 82 課程中）となっている。

（2）信州大学「長野県内高校生による科目等履修生（先取り履修生）」

信州大学では、令和 4 年度後期より、信州大学への進学を視野に入れている高校生に対して、大学の授業科目を履修する機会を提供している。学びの複線化・多様化を高めるとともに、信州大学に対する理解を深めることを目的としている。

（参考１）履修生徒数（のべ数）

・令和４年度後期 13 名、令和５年度前期 29 名、令和５年度後期 13 名。

・修得した単位は、信州大学入学後の卒業に必要な単位として有効。

・それとは別に「学校外における学修」として卒業単位に加えている高校もある。（上田高校）

（参考２）令和５年度後期の開設講座（９講座）

古典文学史Ⅰ、古典文学史Ⅱ、素朴な集合論ゼミ、集合論、繊維化学の基礎、STEAM ものづくり入門ⅠB、ATEAM ものづくり入門ⅡB、ミクロ経済学入門
データサイエンスリテラシー

## 3　県内の事例

| | 屋代高校 | 長野工業高校 |
|---|---|---|
| 実施内容 | 大学や研究機関等と連携し魅力的なカリキュラムを開発。<br>・大学や企業と連携した課題研究<br>・大学や企業による先進的な連携授業 | 信州大学工学部の研究室体験等を通し、大学の高度な先端技術研究に触れる。 |
| 期待される効果 | 課題発見能力、協働して問題解決にあたる能力等の向上。 | 思考力や想像力、実践力や技術力の向上。 |

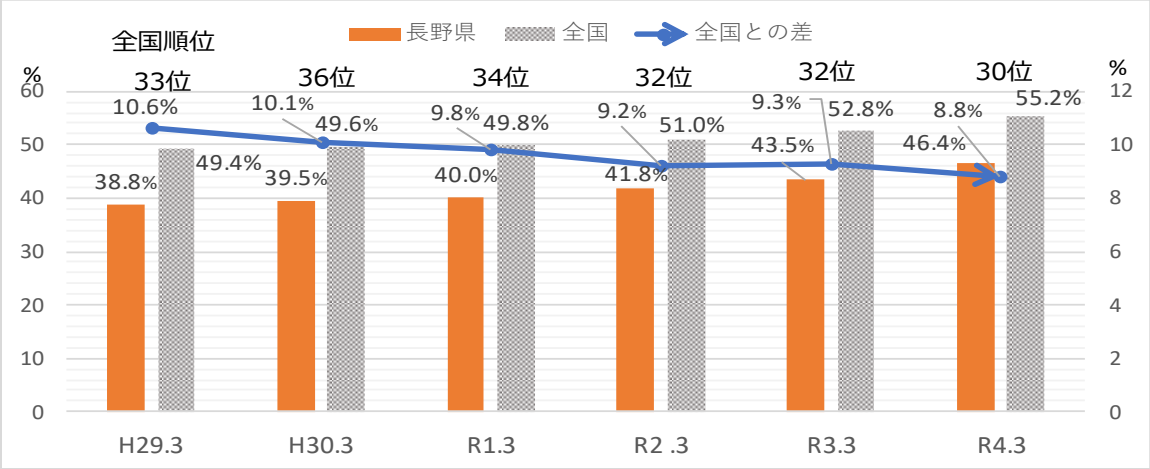
# 大学進学を切り口とした特色化について

## 1　論点

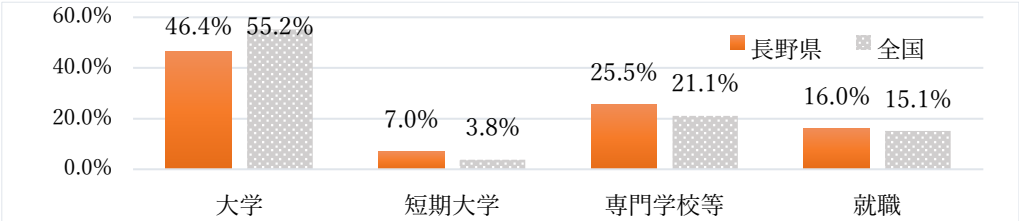
<u>特定の大学への進学支援を特色とした高校は、長野県に必要か。</u>

・生徒や保護者のニーズにマッチしているか。
・メリットとデメリットは、何が考えられるだろうか。
・生徒が進学希望を実現していくために、個別にどんな支援ができるか。

## 2　県内現役高校生の４年制大学進学率等の現状　（学校基本調査より作成、私立含む）




## 3　進学先別の全国との比較（令和４年３月卒業生実績）




## 4　県外の事例

| 東京都 | 大阪府 |
|---|---|
| 進学対策に組織的に取り組む高校を指定。<br>・進学指導重点校　　７校<br>・進学指導特別推進校　７校<br>・進学指導推進校　　15 校<br><br>＜教育委員会の主な支援＞<br>・予備校等の外部講師の学校への派遣<br>・主要教科への教員加配<br>・公募制による教員人事配置 | 豊かな感性と幅広い教養を身に付けた、社会に貢献する志を持つ、知識基盤社会をリードする人材を育成する高校を指定。<br>・グローバルリーダーズハイスクール　10 校<br><br>＜教育委員会の主な支援＞<br>学力向上や進路実現、学校独自の取組に対する支援のための予算措置 |

## 5　生徒・保護者アンケート（第１回懇談会の再掲）

<u>高１進学意識調査（R4.8）</u>
（高１全生徒　回答率 79.0%　回答数 11,032 件）

「高校選択の際大切にしたこと」

普通科
１雰囲気が良い(38%)
２自宅から近い(37%)
３合格できそう（35%）
４大学進学に有利（27%）
５授業についていける（24%）
※複数回答

<u>保護者のニーズ（R4）</u>
(県内 800 人以上回答のアンケート)

「高校選択で重視したこと」

１雰囲気　(67.5%)
２将来の仕事関連　(54.4%)
３自宅から近い　(52.7%)
４特色がある　(48.3%)
５大学進学に有利　(42.2%)
※複数回答

# 中高一貫校について

## 1　概要

中高一貫校とは、従来の中学校・高等学校制度に加えて、６年間の一貫した教育課程や学習環境の下で学ぶ機会を選択できるようにすることで、教育の多様化を推進し、生徒一人ひとりの個性をより重視する教育を目指す学校のこと。以下の３種類がある。

| | |
|---|---|
| 中等教育学校 | 中学校と高等学校の課程を統合し、一つの学校として、一体的に教育を行う。 |
| 併設型 | 同一の設置者が中学校と高等学校を接続した教育を行う。高校選抜は行わない。 |
| 連携型 | 市町村と都道府県など、設置者が異なる中学校と高等学校が、教育課程の編成や教員・生徒間交流等について連携して教育を行う。 |

## 2　県内の状況・全国との比較（R4）

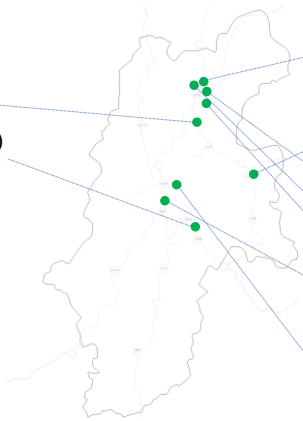
**県内の状況**

**県立（併設型）　２校**
・屋代高校附属中学校（2012 年）
・諏訪清陵高校附属中学校（2014 年）
**※連携型はなし**

**＜倍率の推移＞**

| | R元 | R２ | R３ | R４ |
|---|---|---|---|---|
| 屋代 | 3.25 | 3.18 | 2.69 | 2.98 |
| 諏訪清陵 | 2.81 | 2.35 | 2.76 | 2.34 |

**※両校とも２クラス募集**



**市立（併設型）　１校**
・長野市立長野中学校（2017 年）

**私立（併設型）　５校**
・佐久長聖中学校（1995 年）
・長野日本大学中学校（2004 年）
・長野清泉女学院中学校（2009 年）
・文化学園長野中学校（2014 年）
・松本国際中学校（2022 年）

**私立（中等教育学校）　１校**
・松本秀峰中等教育学校（2010 年）
（2024 年に長野市に１校開校予定）

**全国の状況（都道府県立中高一貫校）**

**＜設置数＞**

| | 併設型 | 連携型 | 合計 |
|---|---|---|---|
| 全国の平均 | 1.9 | 1.6 | 3.6 |
| 長野県 | 2 | 0 | 2 |

**＜上位の自治体＞**R４

| | 併設型 | 連携型 |
|---|---|---|
| 割合１位の県 | 和歌山県<br>**13.9%（５校）** | 福井県<br>**12.0%（３校）** |
| 長野県 | 2.5%（２校） | 0%（0 校） |

## 3　中高一貫校（併設型）の成果と課題（「第１期長野県高等学校再編計画まとめと課題の整理」より）

（１）成果
・広域から期待が寄せられる学校として定着
・６年間の計画的・継続的な学習活動・探究活動が効果的に展開
・異年齢集団の継続的な特別活動等により社会性や豊かな人間性が育成
・教員の相互乗り入れによる教育現場の活性化が期待

（２）課題
・生徒育成ビジョンのより一層の充実が必要
・カリキュラム等の研究を深め県民の期待に応えることが必要
・クラス・講座編成について研究を進めることが必要
・生徒が心身ともに充実した生活を送れるよう丁寧な対応が必要
・県立中学校へ進学する目的をより明確にすることが必要
・教員の多忙化や地域との関わりについての検討が必要

## 4　県教育委員会の考え方（「第１期長野県高等学校再編計画まとめと課題の整理」より）

少子化に歯止めがかからず市町村立小中学校の統廃合が進められる中にあっては、新たな県立中学校を設置することの影響は大きい。現在、県立２校のモデル校で、ある程度の広域から生徒を集め、県民の認知の深まりとともに志願状況等が落ち着いてきていること、また、モデル校を設置した以降にも市立・私立の併設型中高一貫校が設置されている状況にあるため、モデル校と同じ併設型の県立中高一貫校については、現行の２校体制を維持することが適切であると考える。

# 職業系高校について

## ●現状

長野県では、農業、工業、商業などの専門学科を複数持つ総合技術高校を設置し、学科横断的な学びを進めることで社会変化に柔軟に対応する専門性を育成できると考えている。

一方、職業高校のあり方として、より高度な専門教育を期待する声もあり、県立の高等専門学校（高専）の設置などの特色化も考えられる。

## ●高等専門学校（高専）について

### １　概要

高等専門学校とは、実践的・創造的技術者を養成することを目的とした高等教育機関。

５年一貫教育で技術者に必要な専門知識とそれを応用する力を身につけるため、理論だけでなく実験・実習に重点を置く。

設置学科は、例として工業系、商船系、情報系、経済・流通系学科がある。

※卒業すると準学士と称することができ、専攻科まで修了すると学士の学位を取得できる。

### ２　県内の状況・全国との比較

**県内の状況**　国立１校　長野工業高等専門学校（長野市）　　※県立高専はない

- 工業科（情報エレクトロニクス系、都市デザイン系、機械ロボティクス系）
- 募集定員と平均倍率：　毎年 200 人、1.55 倍（H19～R5）
- 進学就職率：毎年ほぼ 100%（卒業生一人に対し、29.6 倍の求人倍率）
- 学生寮あり（収容定員 544 名）　　※これらの情報は、長野高専のホームページより引用

**全国の設置状況**　58 校（国立: 51　公立: 3　私立: 4）　R5 現在

**複数ある都道府県（多くが国立）**

北海道４校（工業４）
三重県３校（工業１、商船１、私立工業１）
山口県３校（工業２、商船１）
東京都３校（工業１、都立工業１、私立工業１）
兵庫県２校（工業１、私立工業１）
広島県２校（工業１、商船１）
徳島県２校（工業１、私立工業１）
愛媛県２校（工業１、商船１）
福岡県２校（工業１）

**高専がない都道府県**

埼玉県、神奈川県、山梨県、佐賀県、滋賀県

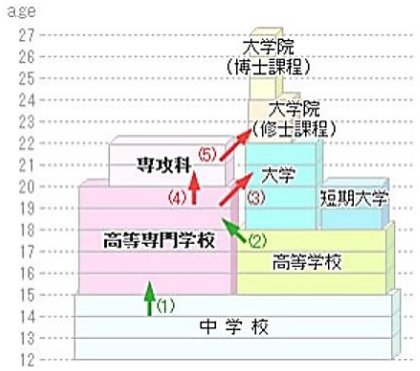
**全国の公立高専の事例**

| | 定員（R5） | 倍率（R5） | 都府県内の他の状況 |
|---|---|---|---|
| 東京都立産業技術高専 | 256 | 1.73 | 国立１校<br>私立１校 |
| 大阪公立大学工業高専 | 選抜 80<br>学力 80 | 1.85<br>1.63 | なし |
| 神戸市立工業高専 | 240 | 1.7 | 国立１校 |

**私立の特色例**

- 国際高等専門学校（石川県）　工業科　英語で学ぶ全寮制＋金沢工業大学・大学院と連携
- 神山まるごと高専（徳島県）　工業科　専門技術＋起業家精神　全寮制　学費実質無料

### ３　高等専門学校の立ち位置




1. 中学校卒業段階の学生が入学
2. 高校卒業者は高専への編入資格がある
3. 高専卒業者は大学への編入の資格がある
4. 高専卒業者は高専の専攻科に進学する資格がある
5. 専攻科を修了して「学士」を得た者は、大学院への入学資格がある

（国立高等専門学校機構のホームページより）

### ４　県立高専設置の効果

- ５年一貫教育による専門技術者の育成
- 県内に高専が２校となり、学生の選択肢増
- 地元企業からのニーズや期待に応えられる。
- 卒業生は、大学に３年次編入できる。

### ５　県立高専設置にあたっての課題

- 一定数の入学生を確保できるか
- 施設整備に係る費用負担（施設・設備はどのような学びを行うかによる）
- 教員の確保（専門科目、一般科目ともに博士、修士の学位を持った教員が主体）
- 設置場所となる地域産業界のニーズの把握と、学校設置に関する理解

# 単位制について

## １　概要

単位制高等学校は、学年による教育課程の区分を設けず、決められた単位（74 単位以上で、学校ごとに定める）を修得すれば卒業が認められる高等学校。生徒は、自分の興味、関心、進路希望等に応じた科目を選択することができる。

現在、本県の全日制県立高校においては、学年ごとの教育課程を修了し必要単位を修得すると進級できる「学年制」をとる学校が多い。

## ２　単位制の効果

・生徒は希望する進路等、自分に合った科目を選択でき、自分のペースで学習に取り組むことが可能
・生徒は主体的に選択した科目から時間割を組めるため、モチベーションが向上
・病気や短期留学などで一部の単位が修得できなくても、長いスパンで必要な単位数を修得すれば卒業できるため、留年を理由とした退学、転学者が減少
・登校不安や学業不振生徒の心理的負担軽減
・留年がないため、１度修得した単位を再度履修することは不要
・１度修得した単位は転学や編入先の学校においても有効
・学校外の学修（大学の先取り履修など）の履修しやすさ

## ３　県内の事例

令和４年度から長野高校、屋代高校、松本県ケ丘高校、軽井沢高校の４校において、単位制の仕組みを活用した教育課程をモデル的に実施。生徒一人ひとりが主体的に学び、希望する進路等を実現するための開設講座の種類や内容、講座展開の仕方等についてその有効性や改善方策を検証中。

## ４　導入にあたっての課題

・多様な科目展開を行うために導入校の教員を増やす必要があり、人件費の増加や、教員の確保が課題
・生徒自らが科目を選択するために、興味関心や主体性が重要
・生徒ごとに異なる単位の修得状況について把握する必要

# 高校におけるインクルーシブな教育の充実について

## １　概要

インクルーシブな教育とは、障がいのある生徒と障がいのない生徒が同じ場で共に学ぶことにより、互いに多様性を認め合いながら、共生社会の形成を目指す教育。

本県では、中学校特別支援学級から高校に進学する割合が約８割になっており、全国的にみてかなり高い。また、全ての高校に発達障がいの診断を受けている生徒が在籍している状況。

各高校における特別支援教育を充実する取組と特別な教育的支援が必要な生徒への通級指導教室の設置や、多様性の理解が進むように高校内に特別支援学校高等部分教室を設置する取組を行っている。

## ２　県内の高校の状況

### （１）各高校における特別支援教育を充実する取組

| | 取組み |
|---|---|
| 高校入試における対応 | ・「高校入試における合理的配慮のフロー」を作成し、全ての中学校、高校に配付。<br>・通知文「障がい等のある生徒の公立高等学校への進学にあたって」を毎年、高校から全ての中学校、特別支援学校に送付し、周知徹底を依頼。 |
| 特別支援教育に係る支援力の向上 | ・全高校で特別支援教育コーディネーターを指名し、校内支援委員会等を設置。<br>・特別支援学校に、高校巡回支援担当教員を各ブロック(東北中南信)に１名ずつ計４名配置し、高校の巡回支援を実施。<br>・各校で「発達障がい支援力アップ」出前研修を実施し、教職員の支援力を向上。 |
| 多様な教育的ニーズに応じる仕組みの整備 | ・特別な支援が必要な生徒について、中学校からの「プレ支援シート」、「個別の指導計画」及び「個別の教育支援計画」等を活用した支援情報の確実な引き継ぎ。 |
| 卒業後を見据えた地域の多様な支援機関との連携強化 | ・地区別協議会等において、各圏域の相談支援機関、市町村福祉担当課等と高校を支える支援ネットワークを構築し、卒業後の自立に向けた連携を推進。 |

### （２）障がいのある生徒もない生徒も共に学び多様性の理解を深めるための取組

| | |
|---|---|
| 通級指導教室<br>※１ | ■設置校：３校（自校通級）　東御清翔・箕輪進修・松本筑摩<br>■指導人数：25 人（R5） |
| 特別支援学校高等部分教室<br>※２ | ■高等学校に併設：５校　更級農業・佐久平総合技術（臼田）・上伊那農業・南安曇農業・須坂創成<br>■盲学校に併設：２校　長野盲・松本盲<br>■各校学年１クラス（定員８人） |

※１　大部分の授業を通常の学級で受けながら、一部の授業について、障害に応じた指導を特別な場(通級指導教室)で受ける指導形態。

※２　特別支援学校の生徒が、地域や設置校と連携し、設置校の生徒と交流や共同学習を行いながら、社会的自立、職業的自立を目指すために設置。

## ３　通級指導教室、特別支援学校高等部分教室の具体的な事例

【通級指導教室：箕輪進修高校】

| | |
|---|---|
| 設置状況 | ・令和元年度設置、<br>・R5 年度は、２年生４人、３年生３人の計７人利用 |
| 取組状況 | ・週２時間、選択科目「グロウアップ（自立活動）」として教育的ニーズに応じた授業を実施<br>・個別指導計画、個別教育支援計画を作成 |

【特別支援学校高等部分教室：安曇野養護学校あづみ野分教室】

| | |
|---|---|
| 設置状況 | ・平成 22 年度開設、各学年１クラス（定員８人）<br>・R5 年度は、１年生８人、２年生６人、３年生８人の計 22 人在籍 |
| 取組状況 | ・南農グリーンサイエンス科フルーツコースとリンゴやぶどうの栽培方法を共同学習<br>・南農祭（文化祭）に参加。対面式、避難訓練合同実施 |

# ICT を活用した教育について

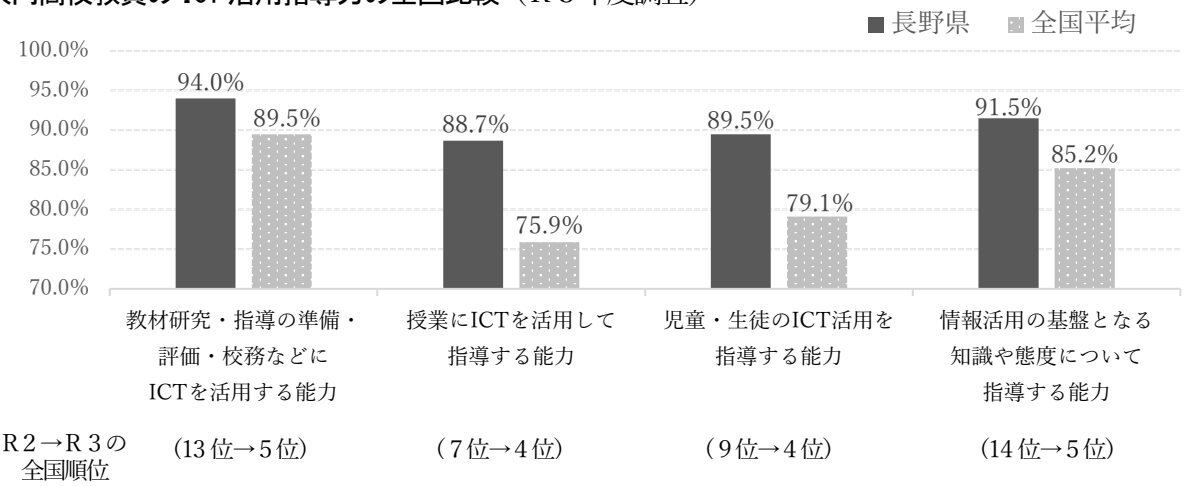
## １　概要

文部科学省は、「ICT 機器と学校の通信ネットワークを一体的に整備し、予測困難な未来を切り拓いていく力を、誰一人取り残すことなく育成する教育環境を実現する」GIGA スクール構想を推進している。

長野県では、１人１台タブレット端末を活用した学びの充実を推進。

高校では、全国に先駆け、令和４年度に全生徒が端末を持ち（1 年生は購入。2・3 年生は端末を購入または学校貸与)、順次個人所有の端末へ切り替え、令和 6 年度には全生徒が個人所有の端末を持参する予定。授業等の様々な場面で ICT を活用した学習活動の充実を図っている。

## ２　県内高校教員の ICT 活用指導力の全国比較（Ｒ３年度調査）




## ３　ICT を活用した教育の効果

・デジタルの力を活用した個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実

・長期入院生徒へのオンライン学習支援の実施による療養中の学びを保障

・個人所有の端末にすることで、自由にカスタマイズでき、学校でも家庭でも愛着をもって大切に扱いながら、学びを豊かにする道具として活用が期待される

## ４　県内の活用事例

探究のプロセスにおける様々な場面において、ICT を効果的に活用

| | |
|---|---|
| 課題の設定 | 一人一台端末の活用により、仮想空間と現実空間の両面から、実社会が抱える課題を発見 |
| 情報の収集 | 文献検索、ネット検索、インタビュー、アンケート、実験、フィールドワーク |
| 整理・分析 | 統計による分析、思考ツール、テキストマイニング等で分析 |
| まとめ・表現 | 論文作成、プレゼンテーション、ポスターセッション、提言等で発信 |

## ５　推進にあたっての課題

（１）ICT 機器の効果的な活用等を含め、教員の指導力・資質の向上、先進的な活用実践の共有

（２）令和４年度に整備完了した電子黒板、無線 LAN 等の ICT 機器の更新

（３）生徒の ICT 機器購入の負担

（４）対面授業とオンライン授業のベストミックスの検討

「特色ある県立高校づくり懇談会」
# これまでのまとめ（第１回～第３回）

## １．これまでの高校とこれからの高校

### ○　県立高校の現状と課題

**【高校の情報発信】**
・「高校が見えてこない」、これは子どもたちの共通の悩み。
・私立はものすごく頑張っている。県立高校はもっと広報を。わかりやすい高校にしてもらうのも大事。
・県立高校はどんなことをやっているのか見えづらい。
・「高校にちょっと魅力がない」といろいろな方から言われるが、情報発信不足や校舎が古いことなどが大きな理由になっていくのではないか。
・高校現場では、そもそも発信すべき情報が少ない。
・高校現場はパンフレットやホームページで発信もしているが、厳しい予算の中で限界もある。

**【偏差値による高校選択】**
・偏差値とかで、どこの高校に行くっていうのが決まると感じた。
・中学生が高校選ぶときに、５教科の学力の点数はすごく大きな要因。
・原付で日本１周をして全国の中３の子の話を聞いたが、偏差値と距離で高校を選ぶ子が多いと感じた。
・特色で選んでもらうことを目指しているが、まだ現場では欠けている。
・普通科でも、こんなやり方で可能性を伸ばしますというような武器がないと選ばれない。

**【特色化の必要性】**
・現在の高校に「特色」がないなら、時間割、単位、学び方、学習環境、カリキュラム、人事など抜本的改革が必要。
・私立の通信制の高校に通う人が過去最大。学校に行って学ぶというスタイルを大胆に変えてもいいのではないか。
・移住で選ばれる理由の一つは、教育環境。
・県立高校でも他県から生徒が来るレベルの改革を期待したい。
・高校には、普通科、職業科、全日制、定時制、通信制などがあるが、そういう制度をこわした学校みたいなものをモデル校として作ってみたら。

### ○　これからの高校に必要な視点

**【高校で育むべき力】**
・失敗することもあるが、社会に出てからその失敗した経験も力にもなると思う。
・生きるイコール稼ぐ力だと思うが、稼ぎ方を知らない子が多い。
・成功体験や前に進めていく体験が大事。やりたいことを突き詰めた結果、お金が必要になるから、そのためにどうすればいいかという経験があってもいい。
・若い人たちに、突き詰める環境を私達が懐深く持てるかが勝負。失敗したとしても、何が必要だったのかを突き詰めていこうというところに学びが生まれる。

**【改革の方向性】**
・「自分の学びたいことを選べる」ことをキーワードに考えてみたらどうか。
・若い人たちがやりたいことがやれることが重要。
・高校は就職する子も進学する子もいる。高校の役割はそこをどう考えるかということが重要。
・高校生をこれからの社会を共に創造していくパートナーと位置付け直すと、そこでの学びは、生きるための能力観に矮小化されてはだめで、自己調整学習に焦点を当てた学びや人生を「楽しむ」ウェルビーイングとの距離感にも目配せをして、学びのイメージを刷新していく必要がある。
・収入に関係なく、進学意思がある子が進学できる体制が必要なので、公立は残して欲しい。

**【多様な選択肢の確保】**
・総合学科ではスポーツトレーナー養成学校の授業を受けるなど、特色のある学びをしており、選択肢があることは重要。
・「選択肢を増やす」と「その選択肢を選択できる」ことは別の話で、実質的に多くの人が選択できるように環境を整えていく必要がある。

## ○　これからの高校に求められる特色化や学び

**【特色化の例】**
・校則が厳しいことに疑問を持つ子が多いので、意味のある校則を生徒と一緒に作ろうというテーマで学校をスタートした。
・公立高校でメイクの授業がある学校が佐賀県にあるが、社会に出る準備、自分のしてみたいことができる高校は人気。
・例えば、学校でサウナ施設を作り、どのような施設にしたらお客さんが来るかとか、何か成功体験をさせてあげるのはすごく良いこと。

**【学びの改善】**
**（オンライン活用）**
・長野県の素晴らしい人たちと学びたいと思った子どもたちをオンラインで繋いでみることもできると思う。
・長野県は山が多くて県域が広い。全県とか県内からオンラインで学ぶというプログラムも魅力の一つになるのではないか。

**（選択と集中）**
・どこでも学べる部分はオンラインや通信制を使って共有化をしながら、残りのリソースは生徒たちと向き合い、ここだからこそできる学びに振り分けていくのが根本的な戦略。

**（体験学習等の充実）**
・高校生のインターンシップのような、地域のニーズと高校生の体験学習を融合し、それらの体験を単位に変換できる制度を設けることができればいい。
・フランスのワーキングホリデーをしたが高校の単位とか認められていたので、そのようなやり方もあれば良い。
・「みんなでグループ学習のようなことで一つの事を話し合って学習をしていく授業」とか、「いろんなカリキュラムを選べる高校」に子どもたちはとても魅力を感じると言っていた。
・屋代付属中が、スタートアップ補助金で買った３Ｄプリンターで小学生向けの科学教室をやっているが、リアリティのある課題は、様々に展開できる大事なテーマ。
・各学校から代表者を募り、「高校生会議」を開催し、行政に携わる経験をさせることがいい。

【多様な生徒への対応】
・学校は、平均的にできる子を求めているように思う、何かに特化した子を受け入れてくれる学校は非常に重要。
・高校受験に関して、発達障害の子に対する配慮がどの学校でもできるようにしてもらいたい。
・試験に関してはルビ振りとかをやっている。
・外国籍の生徒をどう育ててあげるかは課題。
・配慮が必要な子をフォローする環境を整えることが必要。

## ○　特色化にあたっての留意点

【地域との連携】
・特色のカギは、学校の中だけでやろうとしていないこと。地域にある自然や文化等を教育資源に変え、それを活かした魅力ある教育をつくっていくべき。
・学校と地域や企業との壁を低くすることが必要で、それをコーディネートする人材をきちんと確保しなければならない。
・学校と地域の関係者をつなぐコーディネート人材が全国的に見ても重要。
・高校生のＵターン率を高めるには、高校時代に、この地域で生き生きと幸せに働くロールモデルとの出会いがあるかということ。

【教育資源の活用】
・子どもたちが「明日、学校に行きたい」と思える学校を長野県の素晴らしいリソースを使ってつくることが必要。

【教職員の処遇改善】
・高校の特色をより磨いていく上で、現在の教職員だけで限界があるなら、県が予算計上し、それを専門に担うコーディネーター人材等の育成・設置等の検討が必要不可欠。
・教員をどうエンパワーメントしていくのかということは重要なテーマ。
・高校教師には塾講師がうらやむくらい待遇の良さがなければいけないと思う。

## （参考）オブザーバー意見

【特色化の必要性】
・通信制高校の生徒が多くなる中で、工場型の教育のあり方っていうのを、まず変えなくてはいけない時代になっている。

【改革の方向性】
・子どもが持っている特性をこれからの世界に活かせるように育てていくには、個別最適性も重要なキーワード。
・子どもの数が減る中、高校入試のあり方や高校までの義務教育化も少し検討する必要がある。

【多様な選択肢の確保】
・特色には、英語で学べる学校、中高一貫、全国募集など様々な観点がある。

【選択と集中】
・どこでもできる学びとそれ以外の学びを意識的に峻別していかないと、限られた資源を有効に活用できない。

【地域との連携】
・学校と地域がフラットに繋がってほしい。

【教育資源の活用】
・長野県の強みという特色を生かして、高校のあり方に繋げるもが重要な視点の１つ。

【教職員の処遇改善】
・新しい教育を単にプラスするだけだと、教員数を倍増しても足りなくなると思うので、先生の役割をどうするかを県民のコンセンサスをいただきながら解決する話だと思う。

## ２．県立高校の入口出口

### ○　入口の現状と課題

【高校の情報発信】
・中学生には、学校が見えにくいので、もっと情報を知りたいというニーズがありそう。
・情報が不足しているので、工業や農業などは親の影響などがないと選ぶチャンスがない。
・進路選択できない子もいるので、普通科は特色を作って発信しなければいけない。
・工業高校のプレゼンテーションを中学校で実施するなど、宣伝活動が必要。

【偏差値による高校選択】
・偏差値縦割での学校選択は存在する。
・大卒と高卒との給与差が大きいので、みんなとりあえず普通科で大学を目指す。
・偏差値以外の特色がないと、偏差値の枠は破れていかない。

【進路希望把握についての課題】
（既存の学校・学科枠での選択）
・既存の学校の枠にとらわれた形で、中学生が答えてしまう調査を見直す必要がある。
・固定的な学科構成により生徒の希望を誘導している恐れは、事実としてありうる。
・長野は海外からも認識されているので、海外からも学生を集める高校とか、未来に繋がっていくような話が必要。

（調査時期）
・塾の多くの子は、８月には希望校を決めるので、10 月の段階で、子供たちの希望かというと、何とも言えない。
・10 月の調査は、実際には偏差値で輪切りにしていることがあり、純粋な希望とは言い切れないのではないか。

（中学生の選択能力）
・希望を聞かれてもわからないという生徒も多く、周りが言うことに流されてしまうのではないか。
・希望は大事だが、調査のあり方とか、そもそも生徒はきちんと判断できるのかという、現実的な話があるので、そこはしっかり向き合っていく必要がある。
・生徒の希望を大事にすることはとても重要なことだが、現在の調査方法で皆が納得するかと考えると、少し弱いかもしれない。

・中学段階でいろいろな話を聞く機会を増やすことが、高校や大学をどうするかというところに繋がる。

**【育むべき力】**
・一番高校として大事なのは未来を作り出せるような力を持った生徒を育てられるか。
・人間力とか探究力を伸ばすために、様々なことを経験することが大事。
・県内生徒や先生たちに「とりあえずやってみようマインド」がもう少しあってもよい。

## ○　出口の現状と課題

**【学んだ学科と関連のない職業への就職】**
**（農業科）**
・製造業でも食品加工やバイオテクノロジー、環境を扱う業種などは農業科で学ぶ知識を活用できるのではないか。
・農業科の子が製造業の食品加工の仕事に行っていると思うのでそれも踏まえる必要がある。
・農業科の学生に農業という就職先がないのは、農業界の課題だと感じる。
・農業好きな子は一定数いるが、就職先に農業がないという状況があるのではないか。
・農業科を出た子がすぐに農林業に就くように誘導するのは、今の時代ではナンセンス。

**（求人票に基づく就職）**
・現場の感覚からすると、製造業の求人が４割強ぐらいと多く、普・農・工・商で就職している割合も求人票の割合と同じようになっている。
・学んだ学科と関連のない職業への就職状況が、求人票の選択肢に依存するならば、そこを改善することによって構造が変わるかもしれない。
・直接農家に就職する高校生はあまりない。求人票がないから。
・ハローワークの求人票ではない別のルートで農業に就職できる形ができてこないと農業への就職は難しいと思う。

**（学科と無関連な職業への就職）**
・学んできたことが生かされていないことは実際にはないのでは。
・高校で基礎学力を身につけ、大学で専門性を養い、その先に世界が広がった経験から言うと、高校から専門の勉強をいきなり始めると、逆に可能性が縮まることもあると思う。
・学科で捉える思考パターンに囚われすぎており、学科で進路のあり方を考えるということ自体がナンセンスでは。
・産業界の人材不足への貢献を地元定着と理解した場合に、それはコントロール可能か、むしろコントロールする姿勢を示すことが、若者にマイナス要件になるのでは。
・現場の職員としては、違う方面への進路選択は、「ミスマッチ」というよりも、生徒たちが自身と向き合った結果の「進化」と考える。
・実際の高校卒業者は、学んだことを活かしていないと矛盾を感じているのだろうか。
・人手を確保できないという課題は、企業の求人数に対して就職者が足りていない状況を考えると、教育への要請だけでは解決しないと推測できる。

**【出口に対応した学び】**
**（学科を超えた学び）**
・学科構成をどうするかより、従来の学科でどうやって未来の作り手を育てるのか、それに対応した学びを作れるのかというのは非常に大事。
・学科別の卒業先にこだわるよりも、学びの選択肢が広い総合学科や総合技術高校など、カリキュラムの改革が必要では。

・普通科に農業とか工業を入れることはできないのか。普通科のような学びもできる、工業や他の学科もあるように、もっと選べるチャンスを後に延ばすべき。
・学科構成もさることながら、先生方のマインドチェンジも大きな課題。
・全産業が共通して求める能力は、どんな進路でも活躍できる力。
・インターンシップやフィールドワークなど、校外に出て他者と関わる機会を増やすべき。
・生徒のニーズか社会ニーズかという対立的な発想ではなく、生徒がこれから生きていく社会のニーズを踏まえてそこを繋ぐことが重要。

**（キャリア教育の充実）**
・学科構成の修正ではなく、社会人と接する機会をもっと設定していくべき。
・輝く大人たちと出会うと子どもたちに化学反応が起こる。そのような場を作ることが必要。
・ふるさとにはどんな職種職業があるのかを知ってもらうことが一番大事。

**（職業科での進学に向けた学びの提供）**
・進学をしたくても職業校でサポートが弱いとしたら、補強しなくてはいけない。
・職業科の生徒が大学進学を目指せるよう、普通科の学びを取り入れることが必要。
・専門科にいても、進学希望者に対するケアを充実させることは、学習権保障という点においてもとても大事。

**【地元愛・地元就職】**
・進学で他県に出る生徒もいるが、長野県に戻ってもらうには、高校生活の中でどれだけ地域にアクセスできるかが大切
・地元でこれからも生きていきたいという子もいるが、外の世界を経験して、そしてこの地元愛を育んで欲しい。
・１人ひとりのウェルビーイングや人権などが大切にされて初めて地元愛は自然に育まれる。
・長野県のことが好きすぎるあまり、生徒が外の世界を知らないのではと不安。
・長野県や日本という軸を持って、これからやることに挑んでいってほしい。
・グローバルな視野を持ちつつ足元のローカルなこともやることは大事。

## ○　入口出口の対応方法

**【ニーズの把握】**
・社会のニーズ把握には、現在の企業が求める力というより、子どもたちの５年、10 年後に必要な力といった観点が大事。
・産業構造はどんどん変わるので、社会ニーズは先を見ながら考えていく必要がある。
・中高校生のキャリア発達は可変性が高いので、今の希望やニーズだけを考慮して設計するのも不十分だし、今の産業界のニーズだけを考慮して設計するのも駄目だとすると、未来のニーズを県が示すしかないということになるのではないか。
・長野県の産業は時代が変わっても、そのニーズを先取りして継続してきており、今のニーズに応える人材を送ってくれればよいという考えの経営者はそんなに多くない。
・適切な希望の把握には、中学生の中に大切な基準があり、かつ高校側に選択肢があり、その情報がきちんと伝わっていることが必要だが、その条件が整っていない中での生徒の希望で決めるのはちょっと乱暴。

**【学科構成比の決定方法】**
・中学生の希望を聞くのもいいが、県がどういう県にしたいのか、教育をどうしたいのかを、県や教育委員会が専門的な知識を持った上で決めていくべき。

・こういう未来を作るという県のビジョンと、未来のニーズからどういう教育が必要かを、バランスを見ながら、県立高校をデザインしていくというのが基本
・県のビジョンに見合った形にするのも一つの方向
・農・工・商という分類よりも、そこでどういう新しい価値を生み出せるのかという観点で、学科そのものを変えていく方法もある
・学科の構成を変更するということだけでは、解決は困難だと思うので、カリキュラム編成まで手を入れなくてはいけない。
・専門学科で学んでいる子どもに、今後の専門科をどうしていくかを聞くことも大きなヒントになるのでは。

**（参考）オブザーバー意見**

**【偏差値による高校選択】**
・この地域でこの成績だったらこの辺みたいな相場観がある。

**【既存の学校・学科枠での選択】**
・進学重点校という高校が必要か否かという議論は少なくともすべき。
・介護学科は長野県にはないし、観光も白馬だけで地域的に限定される。
・海外大学に直接行く子どもの大学進学をどう考えるのかということは重要。
・中高一貫教育を、メリットデメリットを検証しながら、検討する必要がある。
・公立高校同士の編入はもっと簡単にできる工夫が必要。

**【学んだ学科と関連のない職業への就職】**
・農業科を出たから必ずしも農業をやる必要はないが、農業科から農業に就く人が少ないなら何らかの議論が必要。

**【出口に対応した学び】**
**（学科を超えた共通の学び）**
・変化が激しい中、時代が変わっても通用する学科に捉われないコアカリキュラムが必要。

**【ニーズの把握】**
・今のニーズに対応するのではなく、未来のニーズをどう汲み取るのは非常に重要。

## ３．県立高校の特色化・魅力化

**【特色化の前に】**
**（目標等）**
・長野県の高校生がどんな能力を身に付けるべきだろうかという根本的な議論は重要。
・どのような能力を身に付けられるのか、進学率などを出したときに、メリットや弊害が出てくるので慎重な議論が必要。
・子どもの希望実現率ナンバーワンや高校生のウェルビーイング日本一など、難関大学進学率ナンバーワンのような昭和的価値観ではなく、未来型のコミットメントの旗を掲げてみては。

**（基礎学力）**
・特色もいいが、県全体として基礎学力を上げ、『学ぶ力』を育てることが大切
・探究の発信をするときに、ベースになる学問をおざなりにすると、大人になって困るのでは。

・一番問題なのは詰込まれていなくて欠落していくこと。学ぶ力を育てることは大切。
・学力の底上げは大切だが、勉強が嫌いな生徒もいることは忘れないでほしい。

**【特色化の方向】**
**（進学実績等）**
・特進クラスのように、受験に特化したクラスも見えやすい魅力の一つ。
・進学率や部活が強いかどうかなど、分かりやすい基準で生徒や保護者は選ぶ。
・学校は生徒の夢実現に頑張っているが、東大や国公立の進学率が学校の人気に関わることとどう折り合いをつけるかが課題。生徒の希望や夢と乖離しないように見守る必要がある。

**（外国語等）**
・グローバルの世の中において、外国語やコンピューターサイエンスは教育インフラ。
・世界にもっと目を向けて、海外のトップ校に進学できる高校があってもいい。

**（多様な体験・選択肢）**
・須坂創成高校のように、一つの学校でいろんな選択肢がある学校は選びやすい。
・アルバイトのデュアルシステムなど、日本らしい単位互換性システムを。
・教育だけでなく産業界も巻き込んで〇〇×STEAM という枠組みも面白い。
・信州の自然学習と農業を全学校で必須はどうか。
・人とのかかわり方を高校時代に身に付けることが大切。自分の価値観を広げ仲間の考えを許容できるようになることが重要。
・あまり大人が関与しない、生徒の自治を特色化に。

**（ゆとりある高校生活）**
・生徒は、部活や探究で忙しい。
・夏休みが短くては、やりたいことや新しい出会いがないまま終わってしまう。地域の夏祭りも楽しめる余裕を。
・高校生活の余白がもう少しあって、豊かな体験や学びができるのでは。

**【特色化するには】**
**（民間との連携）**
・中山間地校含め、塾などの民間との連携を考えてもいい。

**（教員の役割）**
・学力があり学び方がわかる人は YouTube 等で学べばいい。困っている人を助け、各自の学ぶ力をつけることが、先生に必要な力。いままでの一斉教育ではない形があると思う。
・教員の役割がティーチングから、もっと子どもに寄り添う形へ変わっていく。
・自分が教えなくてもネットに素晴らしいものがある中で、どうやって折り合いをつけていくのか、教員としての存在意義に悩む教員もいる。

**【特色化の留意点】**
・特色化すると、特色が合わなかったときに、他校等への行き来を柔軟にする必要がある。

**（参考）オブザーバー意見**

**【特色化の前に】**
**（目標等）**
・子どもたちがどういう能力を身に付けて出ていくかという議論が学校の特色の前提。
・県立高校を出た子に、こういう能力を身に付けることを保障するということを明確にし、読み手目線の対外的な発信が大切。

・目標をわかりやすい言葉で、何にコミットメントするのかを示していくことが必要。

**【特色化の方向】**
**（進学実績等）**
・受験の合格実績も特色で、産業界や移住しようという人も見ている。
・受験勉強の競争には参画しない道を行くのか、そういう学校も作るのか、長野県全体でそういうこともやっていくのか意思決定しないで議論があいまいなまま進むのは良くない。
・外形的な進学率を上げていくことの是非は県民の皆さんと学校関係者との議論が必要。

**（多様な体験・選択肢）**
・自然学習と農業を一緒にするのは、「信州やまほいく」と同じ考えで、長野県の強みをどう生かすかが特色化で重要。

**（ゆとりある高校生活）**
・夏休みをもっと延ばすべき。

**【特色化するには】**
**（民間との連携）**
・塾との連携や地域との連携は、長野県は対話と共創を掲げているので、学校の先生や子どもたちにいろいろな方と接していただきたい。

**（教員の役割）**
・デジタルが進んで、A 校 B 校の特色という発想ではなく、複数校で一つの学び場へと変えないといけない。そのためにも先生のあり方を変えないといけない。
・わかりやすい先生の授業をオンラインで配信して、他の先生は授業の躓いている子の対応などを実施するには、踏み込んだ議論が大切。

**【特色化の留意点】**
・入る学校を間違えたという子は潜在的にいる。進路選択の見直しに柔軟性を持たせてあげることが重要。

## ４．県境校や中山間地校の特色化

**【高校再編】**
・本当に再編は必要なのか。再編基準はそもそも何をベースに作られたのか。分校という形としても残すべき高校はあると思う。

**【県境校ならではの特色化】**
**（地域資源の活用）**
・地元に根ざした高校のほうが、地域との連携はやりやすく、魅力につながる。地元ならではの学べる場所を残していっていただけるといい。
・県境校が地域の拠点になり、自治体や地域で教育資産を共有する。
・徹底的に地域資源を最大限活用することが大切。地域の人やモノ、市町村のお金も含めて使うことが全国的に進んでいる動き。
・地域側や市町村側が土日の学習支援の環境を作っているところもあるが、それを実現するには、教員だけでは難しい。専従のコーディネーター配置が大切。
・地域産業や自治体との連携の中で学校をどうするかという議論が必要。
・高校再編の議論は、少子高齢化の中では、高齢者の活用を検討することも必要。

・白馬高校など、高校自体を観光地にできないか。
・ふるさと納税を活用した企業との連携を魅力化へ。
・地元とのつながりを大事にすれば、地元の高校に行くという選択肢も出てくる。

**（オンラインの活用）**
・インターネットでの授業など、県境高校でもいろんな先生の授業が受けられれば、大学進学を目指す子どもであっても、地元高校という選択が広がっていくのでは。
・オンラインの徹底した活用で、その学校に教員のいない科目（英語以外の外国語、情報、地学など）の授業も実施し、個別最適な学びの実現を。
・一学校主義をこえていくことが重要。小規模校ネットワークスクール構想のようなものをモデルとして作り、オンラインの活用や個別最適な学びを見せていくことが必要。

**（他県等との連携）**
・近さや進学率を見て、魅力があると思えば、隣の県でも進学する。
・中山間地は同質性が高い子たちがいるのが特徴。全国募集や学校間でのオンラインの交流、他校への留学など、越境や交流ができる開かれた学校へしていくべき。
・県境は選択肢が少ないから、全国で生徒の奪い合いをするより、隣接県と連携したほうが生徒のためになる。

**【留意すべき点】**
**（多様な生徒への対応）**
・県境校は、地元の子たちのニーズは多様なので、特色化を出すと地元の生徒に選ばれにくくなる。一つの学校の中でその多様性に対応することが必要。
・県境校は学力幅が広いので、より個別最適が必要。小規模校は、教員の数も時間も少ないのに、多様性に対応するのは、ものすごい大変。
・県境でも多様な学びができるような形が必要。軽井沢高校や長野東高校のように、単位制などが多様性に繋がる。

**（教員人事）**
・県境校には、初任の先生しかおらず平均年齢が 30 代。特色化するには人が必要。

**（参考）オブザーバー意見**

**【留意すべき点】**
**（教員人事）**
・教員人事の問題は、僻地手当等は県で考えないといけないが、公務員で人事配置の中で動いているので、教員の人事のあり方として考えないといけない。

# 「特色ある県立高校づくり懇談会」にかかる
# 市町村・市町村教育委員会アンケートについて

1　概要
　特色ある県立高校づくり懇談会のこれまでの議論を踏まえ、高校の更なる特色化・魅力化について議論を深めるために、アンケートを実施

2　アンケート期間：令和５年 11 月 28 日～12 月 18 日

3　アンケート対象：長野県内全市町村長及び市町村教育長

## 1　これまでの高校

### ○　現在の県立高校の良い点として今後も残していくべきもの

**【多様な選択肢】**

**（高校配置）**

・様々な課程や学科の高校があり、その組合せによって多様な学校がバランスよく配置できている
・多岐な職業への就職に向けて、県立高校の学科が編制されている
・各校の特色が濃く出され、一人ひとりの生徒が自己実現を図っていると思う
・１つの学校に多くの学科があり、長野県の良い特色
・多様な選択ができる
・県全域に等しく高校教育を提供し、生徒の学びを支えていること
・どの県立高校でも平均的な教育を受けられる事が良い点でもあり、残していく点と考える
・学びの選択肢が多い点
・高校が都市部に集約しておらず、中山間地域や町村にも県立高校があり、その地域の維持や発展にも欠かせない存在になっている
・校種が多く、多様な学びの場があること
・地域に根付き、地域に根差した高校が存立している
・県立高校主体の長野県の高校教育の中では、引き続き職業科・専門学科の活力・規模を維持して地域の中堅人材を育成していってほしい

**（特色ある学科）**

・特色ある学科、コース等を設置して学びへの興味を広めていること
・SSH（スーパーサイエンスハイスクール）や探究科など、学びの変革に先進的に取り組んでいる
・探究科など特色ある学科構成が増えてきていることは良い傾向
・特色ある学校づくりが展開され、卒業生も市内で多く活躍している
・林業系の学科など全国的にも特筆すべき学科
・スポーツ科学科や探究科など特色を出そうと努力をしていること

**（個に応じた学びの確保）**

・発達障がいのある児童生徒が増えている状況を踏まえ、多様な学びの場を用意していること

・半公的な放課後学習や塾等を行いながら個に応じた学力向上を図るよう取組
・生徒一人一人に寄り添った教育活動
・丁寧な生活指導

**（各高校の取組）**
・長野県教育委員会の方針を受けて、各校の特色を出す努力をしていること
・学校独自の特色ある取組
・専門高校、総合学科高校、一部の普通高校の中に魅力的な取組が見られるようになってきた
・普通高校でも「探究」など魅力ある取組が出てきている
・各高校の社会で期待されている役割を踏まえた教育活動

**（通学区）**
・学区制について以前より緩やかになってきており、生徒の選択肢を広げていること
・かつての 12 学区制から緩やかな学区制にした点は、生徒の選択肢を広げており、評価できる
・第 2 通学区は全学区と接しているため、自分の学力や学校の特色により多様な選択が出来ること

**【残すべき学び】**
**（学びの工夫）**
・経験すべき行事や教育活動が大事にされ、教科等の学習とともにバランスの良い教育課程
・思考・表現力重視の授業の成果が見て取れ、指導の改善が図られている
・未来の社会像やそのための教育像を見据え、教育振興基本計画に基づいた教育がなされている
・現在の学習指導要領の理念を具体化しようとした授業改善が行われていること
・県立高校でも大学への進学率が高いこと（都会だと大学へ行きたい子どもは、私立高校へ行く）
・県外からの学生も受け入れたミックスホームルームなどの学校経営

**（探究的な学び）**
・探究の時間を重視しての「学びに向かう力」の育成に努めていること
・探究活動をはじめ文化活動やスポーツ活動等、まちづくりに関する地元貢献

**（地域に根差した学び）**
・フィールドワークや伝統芸能研究など地元に目を向けた学習
・地域と共に進める地域に根ざした学び
・他者と協働し、地域課題の解決に取り組む能動的な学習
・地域の特徴である多文化交流・観光・環境・山岳・スポーツといった学びを地域企業や住民の方が講師となって行っているデュアル学習
・地域性を生かした魅力ある素材で追究していくことを保証している地域高校
・地域に根ざした学びの展開
・地域の実情に合わせた教育
・各学校・地域の伝統風土を尊重している点
・地域を基礎とした探究学習をしていただけることで地域のことを改めて知ってもらえて感謝
・地域の文化、特性を生かして生徒を育ててきた農業高校など
・各地にある高校は、地域の特性を活かした学びの場であってほしい

**【地域との連携】**

**（地域）**

・特色ある学校づくりに向けて、各校が地域や他機関等と積極的に連携を図る姿
・地域に根差した高校として地域と共にあり、地域の人間から愛される高校
・地域の事業所等とつくり上げてきたキャリア教育等の活動や交流
・県立高校と地域が密に話し合いができていること
・学校と地域との連携を大切にした学校運営
・地域とのつながりをいかした学びの構想
・地域と連携した特色を活かした学びの確保
・地域の特徴ある学びを地域企業や住民の方が講師となって一緒に行っている
・地元の高校生には地域と連携したまちづくりに貢献していただいており、地域活性化の担い手として、人材育成の考え方は今後も是非残していただきたい
・地域（地域文化・歴史・自然・地域貢献・学習）との一層の連携

**（小中学校等）**

・小中学校と連携した学習活動
・地元の小中学校や大学等とつくり上げてきた交流や連携等
・生徒が地域の方や小中学生と関わりを深め、地域を理解し、将来へ向けての提案をしていること
・町内の環境学習活動に参加し、小中学校との交流授業も積極的に実施されているところ

**【校風】**

**（自主性の尊重）**

・生徒の自主性や自律的な活動を尊重する伝統、放任とは異なるこのような理念
・生徒の自由と自治
・生徒と教職員による自治的な気風
・生徒が自らその高校の核を作り出せる（松本蟻ケ崎高校の書道部等）
・制服がないなど、比較的自由で闊達な雰囲気がある（その分、生徒の自律性が求められている）
・生徒会活動や自ら考え行動するという主体的行動
・制服の私服化等、生徒が校則について議論できる校風
・生徒会や文化祭、班活動など、学校の特色や生徒の主体的な活動を育んでいるカリキュラム外の活動については、ぜひ継続してほしい
・それぞれの学校の独自性や特色、自由な気風が尊重されている

**（独自の伝統等）**

・建学の理念や歴史を色濃く残して独自の校風が築かれている
・それぞれに歴史や伝統が築かれ、その高校に入学したいと思う学校としての魅力や校風
・地域に根差した県立高校として町の発展とともに特色ある校風をもって発展し続けていること
・文化祭や強歩大会等の行事、部活動、髪型や服装など創立当初からの特色や校風
・母校に誇りを持てるのが県立高校の良さとして伝統になっている
・一人一人の生徒にとって自分の卒業した高校が一番よい学校であるという意識
・伝統と歴史を残しながらも新しい学びの方向を探っていこうとしている前向きな姿
・現在の高等学校の校歌は著名な文学者や作曲家の作品である。改めて校歌に光をあて、そこに込められた願いを学校や市民、県民で共有したい

・各高校それぞれ独自の校風があり良い

**【残すべき配慮等】**

**（経済面の配慮）**

・保護者にとって、私立に比べて経済的な負担が軽い
・学費が安いことが県立高校のメリット
・授業料が低い設定であること

**（通学面の配慮）**

・中山間地であってもある程度通学の便が良い
・スクールバスや寮の設置など遠距離通学者に対する配慮
・市町村と協力し合い、学科の工夫をして存続を図ろうとするなど、地域高校を切り捨てていない点

**（中山間地存立高への配慮）**

・県境に近い地域で近隣の高校と著しく離れている高校の存続
・小規模校の存続に向け、地域からの提言を踏まえた新たな取組の実施（公設学習塾の開設等）
・地域の特色を生かし、地域に根ざした高校を存続していくべき

**（施設面への配慮）**

・南安曇農業高等学校第２農場は戦前に生徒の手により開墾された歴史もあり、今後も地域の宝としても大切にしていきたい
・サッカーの必要面積規定条件に合致する第２グラウンドは、南信地区大会の会場となる重要なグラウンド

**（その他）**

・学校生活を送る上で困ったことがあっても、公的機関であるため相談しやすい
・性差を含め男女間の協力が生まれるように男性の立場、女性の立場を学ばせるために、男女共学は残すべき
・同窓生や自治体、地域も共に高校の魅力を学んでいく
・将来の就業につながる資格取得のあっせん制度

## ○　現在の県立高校について、課題と感じていること

**【学校選択】**

**（偏差値による高校選択）**

・各校の特色や魅力が曖昧で、普通校ではいわゆる偏差値で選択せざるを得ない状況
・中学校での成績や内申書で学校がある程度決まってしまう
・中学生や保護者に県教委や県立高校が目指す教育理念が浸透しにくく、学力や卒業後の進学実績によって志願する高校を選択している現実がある
・偏差値による高校選択は今後も存続するか否か。個々の生徒のやりたいこと、学びたいことなどの目的に応じた選択肢が優先される体制づくりを望む
・学校の特色で高校を選択するのではなく、偏差値等成績による輪切りで選択していること
・偏差値で高校が決まる
・能力輪切り選抜形態（偏差値偏重、本音と建前の相違）
・私立高校に比べ、普通科はカリキュラムが画一的で学力・偏差値だけで高校を選択する傾向があると感じる
・信州特有の地域性もあるが、いわゆる地域のエリート高校をピラミッドの頂点とする県立高校に対する古い価値観が根強く残っている

**（流入・流出等）**

・市外からの流入が多くあり、市外の高校に通わなくてはならない生徒が一定数おり、通学時間、通学費等の負担が発生してしまっているのが課題
・通学区を超えた人気校や進学校への生徒の流出により、勉学、スポーツ等の優秀な人材が県外、他地域等に流出してしまうことに大きな懸念を感じている
・県内における各地域の高校の学びの質や魅力、付加価値を高め、他地域に越境入学する流出者より、その高校に入学したいと思う流入者が多くなるような高校づくりが必要
・関係通学区の適正な募集定員となっていない
・私立高校への生徒流出

**【高校について】**

**（情報発信）**

・多くの公立高校で何をどのように行っているのか見えない
・どのような特色があり、どんな学びに力を入れているのかなどの情報発信が少ない
・入学試験における評価の基準などの情報がもう少し可視化されてもよいのではないかと感じる
・各校の普通科の特徴的な取組がなかなか把握しにくい
・特色や良さが十分 PR されていない
・各校で取り組んでいる特色ある教育活動の公開や広報活動をさらに進めること
・中学生が高校での学習や生活についてパンフレット等で学んでいるが、より実感をもってそれぞれの高校について知ることができるようにしたい
・私立に比べて学校の特色が見えづらい
・自校のＰＲをもう少し地域に発信してほしい。特に普通科の存在意義が薄れているように感じる

**（特色化）**

・中学生や保護者に選んでもらえるために、この高校ではこれができるというようなオリジナリティ

やブランド力が必要
・興味のあることに打ち込める環境、将来の希望や職業につながる視点での学びの選択肢がない
・生徒がいろんな高校にチャレンジできる制度があれば良いと思います
・音楽科や英語科等特色ある取組をしている事を評価している。大学や高専と違ったもっと身近で現実的な専門教育を増やし(例えば「公務員科」)、ゴールを地元に設定した教育があってよい
・「教育移住」が増加する中で県外から移住者を呼び込める特色のある高校ができるとよい

**（私立との比較）**
・私学に対して学科選択の自由度が低い（ほとんどが普通科）
・私立に比べて学校の特色が見えづらい
・私立学校のように特色ある高校教育がなぜできないか

**（普通科）**
・普通科において、特徴が見えにくい
・もっと特色のある高校にすべき。どの学校も中学校の延長のような学校が多い（普通高校と呼ばれている高校）

**（スポーツ）**
・特色を出すのはよいが、スポーツ科学科などは、スポーツ関連しかやらない＝スポーツ関連にしか就職できない、イメージがある
・学業とスポーツを両立することを前提として、さらに「とことんスポーツに取り組める」高等学校は創れないものだろうか

**（進路変更の弾力化）**
・学校によってその後の進路も決まってしまうことも多分にあるように思う
・普通高校、職業高校いずれの場合も、高校入学時に選択した学びの方向性を途中でも変えられる仕組みが必要
・高校に入学してから自己の進路について考え方向を決めていく生徒も多いので、普通科、職業科どちらに在籍していても柔軟に対応していけるような仕組みが必要
・高校中退の問題。いくら考えて高校選択をしても、ミスマッチはどうしてもあり中退となることがある
・幅広く学ぶ上で、科を跨いだ横断的なカリキュラムを構想することが難しいように思われる
・高校入学後に学科を変われること（転学科）が難しい現状の改善
・友人関係等で不登校となった場合の転校（転学）が容易でない

**（他機関との連携）**
・小中（義務教育）との連携が薄い
・中学校や地域などとの交流の一層の充実
・地域や所在市町村の小中学校との連携活動
・中学校との連携や交流を一層充実させ、各高校の特色や重点的な取組を周知させたい
・学校にもよるが、大学等との連携を深めるべきではないかと思われる
・市内に４つの県立高校があるが、相互の高校間連携について、一層の充実を期待したい。部活動等の交流から、さらに生徒会交流、探究的な学びの共同追求など発展を期待したい

・県立高校であっても地元市町村との連携をする

**（施設の老朽化）**

・学ぶ環境として校舎の古さ、現代の教育に対応できているとは言いがたい教室環境等は大きな課題
・財政的に厳しいのは承知しているが、私立高校と比較すると施設や設備の充実度は見劣りする
・施設や設備が老朽化している
・施設の老朽化が進んでおり、私立との格差が大きい。（学びの環境の魅力は大きい）
・施設の老朽化

**（学校行事・部活等）**

・新型コロナウイルス感染症で制限された様々な活動の完全復活。高校時代の行事は将来への思い出のほか協調性という大きな財産にもつながる
・以前に比べて高校生に活発さがなくおとなしくなった印象
・定員割れの高校や学科が生じてきていることから、適正な教育・部活が施しにくいこと

**（通学への配慮）**

・遠距離通学生徒に係る保護者の負担
・通学の利便性、遠隔地からの生徒への配慮
・通学における利便性の配慮（駅からのアクセスの向上）
・寮の完備を含めた、遠隔地からの生徒確保

**【学びについて】**

**（探究的な学び）**

・「探究」という視点からみて、県立高校の授業のあり方が県の方針に沿ったものになってきているか、やや疑問に感じる
・高校ではまだまだ「探究型」の学びが不十分であると感じる
・より探究的な学習が行われるよう教員の日々の授業改善をすすめてほしい
・「総合的な探究の時間」がどの学校でも充実しているとは思えない
・総合的な探究の時間の内容の乏しさ。生徒の必要感がないままに呼ばれた講師の講義を聴くだけの総合が行われていないか
・探究型授業が本当の探究型になっているか

**（高校で育むべき力）**

・成人が 18 歳になり、社会生活に求められる経済の仕組、政治、宗教等、義務教育であまり扱われない分野を高校で学ぶことが重要となっているが、その辺の取組があまり見えてこない
・大学は今や誰でも入れる時代。だからこそ社会へ送れる人材を作り出せれば
・進学校、地域校いずれにおいても生徒一人ひとりの最善の利益の追求が十分ではないのではないか
・生きる力、自律心のある高校生を育てる

**（学力）**

・難関大学合格者が少ない
・大学進学率をどうみるか。進学率が高いことが良いとは考えないが、生徒の可能性をどこまで伸ばせているか
・自立した社会人となるため、もう少し勉強を充実させ、学力のボトムアップを図っていく事が課題

と感じる
・学ぶ生徒と学ばない生徒の二極化現象。場合により中学レベルの学力の学び直しの必要性がある

**（専門教育・キャリア教育）**
・普通科でのキャリア教育の不足
・高専の希望者が多く、狭き門になっている。不合格となり第二志望の普通高校や工業高校にまわる生徒がいるが、高専との違いに落胆して中退してしまう事例があった
・キャリア教育、社会体験的な学び、ＩＣＴ教育が不足している。（特に普通科）

**（その他）**
・学習内容についても、特にいわゆる進学校と呼ばれる高校は、大学受験に向けたものになりがちで、もちろんそれも重要だが、個々の生徒の学びたい意欲を育てることが必要
・普通高校は特に故郷教育がなされていない。教師が地元にどれだけ愛着を持っているか不明
・生成 AI などの登場により加速度的に変化する教育環境のなかで、時代の変化に対応した教育内容を提供しているのか疑問

**【多様な生徒への対応】**
**（特別支援学校・特別支援学級）**
・松本市の特別支援学校の分教室は、定員が少なく就労を目指すニーズに応えられない
・特別支援学校は定員をこえる児童生徒がおり、高等部は満員状態。南安曇農業高校の分室には、希望しても入れない状況
・義務教育段階で特別支援学級において手厚い支援を受けてきた生徒が高校段階で支援が途切れる
・自閉症・情緒障がい学級の生徒の生きづらさを理解し、個性、能力を伸ばす受け皿が不足

**（受入れ・サポート体制）**
・発達障がいのある生徒の受け入れ体制
・発達障がいを持つ子ども、不適応傾向のある子ども等に対しての対応が不十分ではないかということを聴くことがある
・生きづらさを抱えている生徒へのサポート体制
・学びづらさなどがある生徒に対してのフォローが十分でない面もあるのではないか
・多様な生徒の状況から、通信制高校への進学者が増加している。多様な生徒が学べる環境に県立高校がなっているかが課題のひとつ
・多様な生徒の受け入れは、実際に受け入れられるかをそれぞれの高校と協議しないと難しい
・自己肯定感の低さや課題を抱えている生徒への個別のケアが十分ではないように感じる（結果として退学につながるリスクが高い）
・特性を持った生徒に対する対応が不十分であり、教員の理解も進んでいるとは言えないと感じる
・友人関係等で不登校となった場合の転校（転学）が容易でない
・特性を持った生徒に対する対応が不十分であり、教員の理解も進んでいるとは言えないと感じる

**（不登校）**
・不登校等の生徒への支援
・自由意思で高校に進学しているにも拘らず、不登校の生徒が多い

**（その他）**
・インクルーシブ教育の充実
・特性を持った子供たちへの対応が系統的・計画的になされているか不透明
・障がいのある子や不登校生徒の自立への道のりを、高校だけの視点からではなく、義務教育の立場からも考えてほしい

**【教員について】**
**（負担軽減）**
・教師の負担軽減（弁護士に相談できる体制、事務的業務のデジタル化による軽減）
・高校生及び教師の悩み・課題を気楽に聴くことができる方策
・真に高校生を考える教師の意識の醸成とそのための支援
・部活顧問の働き方改革

**（授業改善等）**
・小中学校にも共通して言えることだが、一斉教授型の授業からの脱却が課題
・学ぶ楽しさを見いだせず、予備校の劣化版のような授業。高校は大学受験のための通過点という位置づけ
・一部の教職員の力でだいぶ進んできているが、旧来の一斉授業から脱却するための授業研究や授業公開の全教職員への浸透
・従前の学びから抜け出せていない先生方もおられるのではないか
・旧態依然とした授業
・高校進学は当たり前の時代。大学受験のための高校授業になっている気がする
・先進的な授業の方法の検討
・教師自身が講義調の授業形態からの脱却ができるか。生徒の主体的な学びに転換できるか
・教師は教育機関だけにとどまらず、外部での社会経験を積む機会があれば良いと思う

**【少子化への対応】**
**（少子化の課題）**
・生徒数の減少に対応した学校の運営が必要
・子どもの減少による生徒数の確保
・避けて通れない少子化により、各学校が生徒の奪い合いとなっている
・人口減少や少子化による生徒数の確保

**（小規模校化の弊害）**
・少子化により部員不足による部活動等が維持できなくなってきている
・人口減少により人と接する機会が減り、コミュニケーション能力を育む環境が狭くなっている
・少人数になれば団体活動など活動の幅が狭くなり、活動の幅が広い都市部の学校を目指すことになるのが課題

**（高校再編）**
・少子化が進むなかで高校再編は逃れることのできない課題であり、今後も各地域との交渉をしっかりと行う必要を感じる
・地域の意向を大切にした高校再編の姿勢はとても大切だが、少子化の中で、高校再編は免れない状況であり、粘り強く地域との交渉を進める必要を感じる

・少子化の中で、学校規模が小さくなり、生徒の活動が制限されるなど教育環境の維持が難しくなっている。一定の水準の教育活動が維持できるよう、再編統合はある程度大胆に進めてもいいと思う

**（中山間地存立校・県境校の存続）**

・地域によって、生徒数の減少により存続が困難になること
・地域校への入学者数が著しく減少している
・地域から高校がなくなりつつあること
・人口減少に対応できる地域校の存続
・特色ある学校づくりは、全ての高校において努力されていることであるため、結果として、中山間地域存立校への生徒数の増加には繋がっていない
・地域校ならではの特色が出るように工夫していることは理解できるが、なかなか限界があり志願者の増加にはつながっていない気がする
・地域校こそ総合学科や多部制・単位制を進め、特色を打ち出す必要がある
・さらなる人口減少等によって、県の再編基準に該当している県境にある高校について、県民である高校生の学びを保証する観点から県境に位置する高校の存続が必要
・仮に県境の高校がなくなれば、高校生の県外への流出は避けられない

**（都市部存立校と中山間地存立校の格差）**

・少子化が進む中で都市部高校への志願者が多く、いわゆる地域校との格差が生じている
・都市部の高校に人気が集まり、地域校に志望者が集まらない状況は課題
・都市部と農村部との教育格差を感じる。教員の適正な配置が必要
・少子化に伴い学校規模が縮小に向かう中、大きな都市部はより栄え、中山間地はより暮らしにくい場所になろうとしている

## ２　これからの高校

### ○　新たにどのような学びや特色が必要か

【必要な学びや特色】

**（探究的な学び）**

・探究科の増設や地域校の総合学科化などを進めていくと良い
・「総合的な学習（探究）の時間」により地域の産業・文化を学び、探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、大学や企業と連携して行う
・長野県独自の魅力に目を向け、その魅力を向上させる探究的な学びを徹底して極める高校
・生徒が、探究的に学び、願う進路を実現できる力を身に付けられる教育の実現
・生徒に、探究的な学びを通し、郷土への思いを深めるとともに世界に視野を広げるよう促し、伸びる力を伸ばす機会の確保
・「探究的な学び」を全ての先生方が真剣に学び、地に足ついたものにしていただきたい
・世界と地域を結び付けた学びが必要であり、探究した学びがどう個人と社会のウェルビィーングの実現につながっていくのか、しっかりと示せる学びを特色として欲しい
・探究的な学びが、本気で行える高校が必要
・探究心を培う教育の更なる推進
・自治体の課題につながる総合的な探究の時間の充実
・講義中心から、主体的対話的で深い学びや探究的な学びにつながる授業への転換
・自らのやりたいことを単なる教科ではなく、探究活動や地域と関わりながら実践的に学ぶ機会を高校生に保障
・基礎学力の定着を前提に知的探究型学びの充実
・探究活動の深度化を図り、市町村と連携し探究の成果をまちづくりに活かしていく
・探究学習の推進
・総合的な学習の時間によって、自分の地域の特色、産業、文化を学び横断的な学習を行うことで地域への愛着を持ち、自分が学びたい学習のある高校へ進学できるようになるのでは
・探究的な活動を中心に据えた学びは、ぜひ強力に進めていっていただきたい。そのためにも、基礎基本が十分に身についていない生徒が再チャレンジできるような仕組みの構築が必要
・課題を解決することが、今後の取組に必要
・より実践的な学び、現場に即した探究的学びの実施

**（地域に根差した学び）**

・地域の特色に沿った総合社会学習
・地域の文化・特色・現状を学びの中に取り入れ、地域の生かされる資源等を学びに活かす
・故郷に愛着・誇りをもてるような特色ある総合的な探究の時間の充実が必須
・地域の歴史や文化などを高校教育に取り入れ、魅力ある高校としての教育をつくっていく
・地域の特色をいかした学校づくりや、地域とのつながりをつくり社会との接点をしっかりつくれる学校づくりが必要
・地域の特性を活かし、地域社会との積極的な出会いで、地域の魅力、文化そして課題について一緒に学ぶ機会を増し発信する
・山間地の高校での一クラスの人数の緩和や地域に根ざした教育の重視

・その地域の特色や自然等を考慮した、魅力ある教育課程を入れていくことがこれからさらに必要になると考えます
・生徒の選択の幅を広げるべく、ゼミ形式の授業（地域密着型（信州学））の導入
・生徒自身が地域との深い結びつきを実感できるような学びを実現させたい
・いかなる学校もその地域に根差している。地域の産業、企業、自治体、住民、自然、行事、特有の活動などと結びついた活動の場が用意されているかを明確に具体的に示すことが必要
・地域性とともに広く世界に目を向けた発展性のある夢に向かって歩を進めることができる学び
・地域の課題を探究する学習
・地域に根付いた学び（郷土の文化的価値・意義、地域政策など）
・地域に目を向けた教育（自然・文化・歴史・産業）
・地域の実情に合った特色ある魅力の発信
・地域に学び、地域に発信、還元していく高校
・地域との連携を深めた学習のできる高校
・その地域の特色や自然等を考慮した、魅力ある教育課程を入れていくことがさらに必要
・地域の自然や文化に触れる体験型学習を計画的に実施していくことが必要
・地元の郷土に愛着を持てるよう、地域に根差した特色ある学習
・地域の様々な主体と連携し、地域の課題に取り組む創造的で体験的な学び

**（地域を担う人材育成）**
・その地で育ちその地を担う人材育成を目的とした教育
・地元のニーズに即した人材育成や未来の担い手として地域を創造できる人材を育成するような高校が必要
・高校生のＵターン率を高めるための優遇（助成）制度の充実
・地域の現状の産業や伝統に合わせて、地域と一体になって地元を活性化させるよう従来の枠にとらわれない新たな「〇〇科」というものも考えられる
・社会環境が変化する中で問題や課題に気付くことができ、かつ、地域に活力を与えられる人材となれるよう成長してもらうことが必要
・町内にある小中学校、高校、短大、企業などとさらに連携をするなど、辰野町内や周辺地域で就職しやすい環境を整え、働きたいと思える生徒を増やせるような取組
・信州をいつかは背負っていただける人材の育成、それが県立高校
・普通科の高校も地域に貢献し、将来、地域に戻ってくるような人材を育成してほしい

**（国際的な学び）**
・海外の同世代の若者と議論をして競い合える場が欲しい。国内の常識とか枠にとらわれない柔軟な発想のできる若者を育ててほしい。哲学論議ができると面白い
・全国や世界の最新の情勢をいち早く取り込み、多方面でワールドワイドに活躍できる人材を育てる学びが必要

**（新分野等の学び）**
・AI 等の先端技術を、生徒が学びの中で主体的に活用できる学習環境の整備
・グローバル化や生成 AI など、デジタル分野の進歩を踏まえた教育カリキュラムの提供
・これからは NISA などの投資を当たり前に行う時代であるため、金融教育に力を入れる
・自然環境等を学び将来につなげる環境教育インストラクターや指導員養成学科

・環境問題やデジタル化などについて今後の社会情勢には学びを必要とする分野が多種多様です。そうした課題やニーズについて学べる学科を設置してはどうでしょうか
・これからの社会変化予測に基づく、社会から必要とされる力が得られる学びが必要

**（特化した学び）**
・外部人材を登用するなど、その高校でしか学べないといった「唯一無二」を作り、差別化を図った上で、全面的にアピールしていくことが必要
・医療や看護、介護等、特化した教育カリキュラムの導入を進めることで、目的を持った学生の入学者が増えるのではないか
・生徒に医学をはじめとする先端性の高い諸科学等の学びにつながる学力を付ける柔軟で魅力ある教育課程の編成
・地域の特色やスポーツ・英語・音楽など、一つにおいて特化した高校教育

**（個に応じた学び）**
・学生個々の才能や興味にあわせた教育内容の提供
・それぞれの生徒の個性に応じた「多様性」を掴み伸ばしてゆく
・優れた能力を伸ばせる学校にすべき。それがスポーツであったり勉学であったりしてもいい
・「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実
・長野県には小規模の地域高校が必要であり、個に応じた教育活動を特色として展開したい
・「自分の学びたいことを選べる」ことをキーワードにするのが良いと思う。ここでしかできないことを打ち出す。その後の職業に直結するような学びが良いと思う
・運動や文化、生徒がチャレンジしたいことをバックアップできる、教師や外部講師がいれば良いと思います
・さまざまな進路希望を持つ生徒への対応

**（多様な学び）**
・コース別の学びを取り入れ、できる子（学力のある子）は、より学力伸ばす取組
・授業における対話的な学習の展開、友との協働的な学習の展開が必要。思考・表現力の育成
・一般的な勉強か専門的な勉強か、スポーツ（または芸術）かと選ぶだけではなく、両方選べるような環境を作るべき
・受験学力とともに自立できる力を身に付ける学びの場を増やしてほしい

**（資格取得）**
・将来に向けて資格取得を目指す学習
・英検、数検等の資格取得に積極的に取り組めるよう県による補助をお願いしたい

**（専門学科）**
・いわゆる職業科の高校からも大学進学者を増やしたり、専門コースを設置し資格取得を可能にしたりするなど、専門学科の魅力づくり
・専門学科でも他学科の内容を複線的に学べるようにする
・県立大学などとも連携した高専のような学校をつくる。工業分野とはちがった分野での高等専門学校があってもよい

**（キャリア教育・体験学習等）**
・個々のキャリア教育の充実
・その子に応じたキャリア教育の充実
・高齢者施設や保育園等での実習を取り入れ、他人との交流・関わりを授業で扱う取組
・社会経験の充実（アルバイト経験、異年齢者との交流経験）
・体験や実験、研修、経験に重点をおき、ペーパーテストオンリー評価ではない、実力養成教育の場を設け、同時に地域を上げて彼らの受け皿とのつながりをサポートする
・就職して社会へ出た時に役立つ学びが大切

【高校について】
**（情報発信）**
・多様な学びの場を設ける上で、校種ごとの特色が、中学生にわかりやすく伝えられることを重視してほしい
・各高校での特色ある学びや活動の見える化を積極的に行うべき

**（既存校での学びの発展）**
・すでに特色ある高校として上伊那農業高校があり、地域に密着した活動で地域にも貢献している。素晴らしい取組を展開しているので、参考にしてはどうか
・木曽青峰高校の林業科やインテリア科は全国的に見ても特色のある学科。森林や林業の果たす役割がクローズアップされる中で今の学科を生かしつつ新たなカリキュラムの展開ができればと思う
・小諸高校の音楽科や白馬高校の国際観光科など県外からも生徒を呼べる学科を増やしていくと良いと考える
・農業高校は今以上に地域の産業・文化を受入れ、活躍の場を広げてほしい

**（教育課程・カリキュラム）**
・各高等学校の描く「学校の魅力」において、一人ひとりが、主体的に学ぶ教育課程
・多様な学びの場を全県に配置していこうという方針は評価できる。柔軟な学区制との併用で、生徒一人ひとりの適性に応じた進路が目指せる教育課程を編成してほしい
・普通科において一人ひとりの生徒が自発的に学ぶ意欲をサポートするために、教科横断的な学習など柔軟なカリキュラム編成や実施ができることが必要
・コースにとらわれず自分自身の興味、将来の進路に向けての基礎知識や技術を学べる選択制度。例えば一般教養＋専門性の高い学びが履修できる等
・義務教育のような一律的なスタイルをやめ、生徒の意思で学び方を選べるようなシステムがいい

**（単位制）**
・単位制の導入といった特色ある学びの方針に取り組むことにより、子どもたちの学びに対する注目度が上がり、高校の魅力向上につながると考えます
・高校を単位制のものとし、学校間における単位取得の互換性を取り入れる

**（地域との連携）**
・多様な学びを支える地域との連携
・地域連携が欠かせない
・ボランティア活動やインターンシップ等を通して、地域の人との交流を増やすことが必要
・地域（地元企業含む）と連携した学びや学校の特色づくり

・国型コミュニティ・スクールを取り入れ、地域とともにつくる学校の位置づけを明確にする

**（他機関との連携）**
・地域の小中学校や大学、企業等と関わり合う学びの一層の充実
・職業科の高校での地域の企業等との連携による魅力ある学習の取組
・地域学習や小中学校との合同授業等を進めて、地域での存在感を増す教育活動を展開すること
・地元市町村や地元企業、関係団体との連携
・これまで以上に地域や地元小中学校と連携した取組。進学先・就職先との連携
・高校間の連携や企業や大学との連携をメインにした学びを提供できるような受入体制の構築
・少子化が進む現在、地元小中学校と高校とが互いに必要とされる事業を展開したい
・専門高校と市が連携協定を結び、商品開発や販売など、地域食材の有効活用を図るなど、双方に益の多い活動を展開しているが、今後の充実を願う
・市及び中学生とのキャリア教育に関する協働的な連携

**（施設整備）**
・ねらう教育の具現化は、学ぶ環境である校舎によるところも大きい。財政的な課題はあると思うが、ここに力を入れていくことは魅力化を実現する上で不可欠

**（ＩＣＴ技術等の活用）**
・小規模高校においては、ICT を活用した学習機会の充実と他の小規模高校との交流
・ICT、生成 AI の活用の促進
・40 人 1 学級という枠を離れ、少人数指導をメインに ICT を活用しながら高度な学びが可能になるようなコースを考えてみてはどうでしょうか
・N高や S 高のように ICT を活用して、それぞれのライフスタイルに合わせて学習することができる高校やスクーリングなどにより体験も併せて提供する多様な学び
・通学を基本とする今の教育体制の変革（リモートを主とする）
・通学の負担や学びの自由度から通信制を選ぶ生徒も多いので、リモートなどでも学べるスタイル

**（全国募集）**
・県立高校でも他県から生徒が集まる仕組み
・県外(地域外)からも生徒が集まる高校
・県外からもここで学びたいという高校があってもよいのでは

**（編入）**
・高校選択のミスマッチはどうしてもあり中退となることがある。新たな高校への転学や編入を念頭においたサポートをすすめてもよいのではないか
・学びの場の見直しという視点から、県立高校の編入制度の柔軟化の検討が必要になるかと思う
・多文化共生による魅力ある学校づくり

**（通信制）**
・不登校生徒の通信制高校への進学が際立っている。県立の通信制高校の増設を希望する声も多くなっていると思われる
・N高などの他にない特色を持った通信制高校は、単に不登校生徒への選択肢というだけでなく、多

様化する生徒の価値観や将来像に向けた選択肢として受け入れられていると感じる

**（特別支援教育）**

・特別支援学級の設置

・ハンディをもった生徒が自己実現するのを助けるには、時間と専門的なスタッフが必要と思われる。専攻科を含めた5年制の高等特別支援学校を開設したらどうか

・発達障がいなどの特性を持った生徒にも、安心して学ぶことができる環境と学びの機会が必要

**（部活動等）**

・部活動の特化とその支援

・公立でもスポーツに力を入れ、甲子園に行く高校があってもよい

・苦しみを自身あるいは仲間と乗り越える体験を学年に一つは設定する。競歩大会等

**（通学）**

・通学における利便性の確保（民間バス運行の減少に伴う対策）

・通学の利便性向上

**（教員研修）**

・新たな学びに向けての教職員研修を進めること

・他県の先進的な取組や教育活動を教員が視察するような研修や企画

**【その他】**

・一部の進学校では時間割、単位、学び方、カリキュラム等で特色を出すことが可能だと思うが、多くの県立高校で特色化ができるか疑問

・卒業後の学生が、引き続き学べる場があることも大切

・長野県教育が県民たる地域の高校生にどんな学びを提供し、どう成長させたいのか、県としてのビジョンが県内高校の特色や魅力の根底にあるべき

・大学への進学に向けての公的な学習機関（浪人生を含めて）の設置（OBの先生の力を借りながら）

## ○　特色化にあたり課題と感じていること

【県教育委員会】
**（方針等）**
・県教委が指向している学びを各校で確実に具現化していくことが求められる
・県教委の教育振興基本計画を軸にした諸施策の浸透
・柔軟な学びに転換するための制度設計と現場の大胆なマインドセットが課題
・県教委が指向している学びを各校で確実に具現化していくことが求められる

**（予算・財源）**
・教職員の人数や予算の確保
・予算措置や人選、何に特化するかが課題
・人材の確保、財源の調達
・さまざまな探究的な学びに必要な費用の確保
・学校存続に対する財政面での支援
・お金の問題。県だけでは限界があるので、市町村理事者にお願いして、地元の高校への負担金依頼
・地元の企業、ふるさと納税のようなものがあれば、出す納税者、卒業生はいるはず
・経費の増大

**（高校入試）**
・偏差値ありきの高校入試の傾向が否めない。入試の改革に期待する
・生徒が行きたい高校を選択できる入試制度となっているか検討していくことが求められる
・上伊那農業高校が取り組んでいる括り募集は生徒の学びの応じた仕組みと考える

**（高校再編）**
・高校再編が行われているが、支援が必要な生徒が増加していることを考えると、単位制・遠隔授業及び連携型中高一貫校など学びも多様化させていく必要があると感じる
・再編基準の見直し。人口減少は日本の課題。以前の基準でそれを判断することは無理がある。生徒数が少ない＝教員配置が少ないでは、都市部流出は防げない
・限られた予算の中で高校教育充実を目指すならば、大胆な再編統合が必要になると考えます
・高校再編計画の中で、地域キャンパス校の方向もあるが、教科や単元によって本校とキャンパス校の学びの場を選択できるようにするなど、施設を弾力的に活用したい

【教員】
**（意識改革）**
・職員、教員の意識対応
・先生方が新たな高校の学びをどのように理解し、意識改革を図っていくのか
・県立高校の特色化や魅力化の実現に向けた、各県立高校における教職員の意識改革
・教師の意識改革
・義務教育に比べ、高校においては卒業大学で見ればいわゆる高学歴の教員が多いため、生徒を大事にする教員の意識改革や資質向上のための研修体制を充実させる必要がある
・教師自身の信州愛の育成
・教員の意識変革が一番大きな課題であり、探究学習あるいは生徒主体の学びへの方向転換は並大抵

ではできない（ただ、高校現場も急速に変革の動きがあることは望ましいこと）
・公立、私立の枠を越えて、優れた教育活動や実践を導入する発想や意識を一人一人の教員が持てる雰囲気の醸成

**（指導力・資質向上等）**
・教育は最終的には人、教員の教育観や指導力等が問われる
・高校の教員の質の向上と県教委の柔軟な考え方
・教職員の資質の確保
・進学や就職等幅広く対応できる教職員も必要
・指導者の専門性の向上は、どうしても必要になると思われます
・「探究」をドーンと据えた「ふるさとをため込む」教育がどこまで実践できるか、教員・地域の力が問われると思う
・教員が学校内だけではなく外部とどのようなつながり連携を模索していくことが生徒達には必要かを一層真剣に考え、学校改革に取り組むことが必要
・高校の教員に向けた特別支援教育の研修が必要になる
・教職員の研修
・教職員の学びの充実や他業務の増加

**（授業改善）**
・教師の指導力、授業改善ができるか
・古い一斉授業にしがみついている授業の打破
・指導する側の県立高校の先生方の意識が従前の知識重視・偏差値重視の進路指導では、高校生の将来に向けた適切な指導が難しくなると思う

**（教員確保）**
・先生の確保
・教職員の充実と確保
・新たな学を実践するための、優秀な教員の確保
・教員養成
・地域と共に特色あるカリキュラムを実施するには、教員にも多様性が求められるが、人員の確保が容易でない

**（教員配置）**
・専門教員の配置
・教員数の増加と柔軟な配置
・精通した教師・意欲ある教師の配置
・目的に応じたカリキュラムに沿って支援・指導できる教員の固定化が予想され、人事異動の課題が考えられる

**【高校】**
**（情報発信）**
・高校の特色の情報発信
・職業科の高校の魅力の発信が弱いように思います

・対外的に発信するに際しての教師の意欲とスキルの不足。そのための県教委としての経済的支援や民間からの専門人材投入などの体制強化が必要ではないか
・HP などの情報発信をしなさすぎ
・学校での教育実践と発信・提言が、若者の可能性を大人が知り、地域・県民を元気づけ、誇りを感じるようになると思われる
・学校ごとにビジョンを中学生に見せ、そこで学びたいと思うような特色を前面に打ち出すこと

**（多様な学び）**
・単位制・遠隔授業及び連携型中高一貫校など学びも多様化させていく必要があると感じる
・特に多部制・単位制への転換は地域により様々な意見があると思われる
・スポーツも専門的にしつつも、しっかりとした勉強のできる環境を作るべき（芸術、音楽も同じ）
・個のニーズをどのように把握していくか（1 学級の生徒数減、ＩＣＴを活用など）
・学びの筋道をどのようにしてつけていくか、探究型学びの深い追究のやり方
・ひとりひとりの生徒に合わせた学校の運営や教員の対応の構築

**（教育課程・カリキュラム）**
・様々な人々とコミュニケーションを通して、体験的な学びができるカリキュラムづくり
・特色や魅力を十分に発揮できる教育課程の編成とそのことの全県や地域への積極的な発信
・生徒たちのニーズによって柔軟にカリキュラムを構成していけるような仕組み
・伊那新校は生徒数が多くなり、所謂学力の幅も大きくなるので、どのような教育課程を組むか
・高校の教育課程の中で、探究的な学びを実現させる時間をそれぞれの教科でどれだけ確保できるか
・ICT を主軸にした遠隔授業など少人数だからこそできる教育課程、教育方法に視点を置きモデル校を示してほしい
・教育課程の弾力化

**（他機関との連携）**
・高大接続の課題が残っている
・学校間や地域との連携等、ニーズに応じて幅広く学びを保証していける仕組み
・学校間や他機関と連携してオンライン学習を推進し、特色を打ち出したい
・小中学校にとって、高校生が自分たちの目指す「高校生像」につながることが必要。課題として、互いが共通ビジョンを持てること、時間を生み出していくことが求められる
・大手予備校との連携など
・ボランティア活動やインターンシップ等を受入れる施設側の理解と協力も必要
・義務教育と高校教育の連携・交流
・小中学校、高校、短大、企業などとの連携の仕組み作り
・地域関係機関の連携

**（地域との連携）**
・住民や地域の理解。地域との接点の持ち方
・地域連携
・地域の理解、及び連携とそれを持続させ続けること
・地域高校の位置づけの明確化
・通学区内の高校の距離的な分散。１自治体１高校

・中山間地域では地域住民の高齢化等地域の疲弊化による「地域との交流・連携による学びの場の創造」が懸念
・地元市町村からの支援の充実
・１自治体１高校を原則とし、教育長や産業課、福祉課など当該自治体の関係者が学校評議員として学校運営に参画する
・それぞれの自治体、教育委員会とつながるような組織の構築

**（地域連携コーディネーター）**
・地域コーディネーターとの連携等、地域とのつながりを大事にした学校づくり
・企業や行政、福祉団体等とつながりのある人をコーディネーターとして雇用し、その地域ならではの探究課題をコーディネートしてもらう
・地域と学校を結ぶ連携コーディネーターの適任者の確保
・連携体制の構築、コーディネーターの専任、費用負担の考え方など
・地元の優れた人材と高校・高校生とを繋ぐコーディネーターを各校に配置
・体験型学習等を進めるコーディネーターが存在しない。設置を強く要望する
・学校、地域、企業の連携とそれらをつなぐコーディネーター
・様々な主体をつなぐコーディネーターの確保

**（外部人材の活用）**
・外部からの講師の招聘等の仕組みづくり
・優秀な講師を国内外からひっぱるべき
・地域の理解や専門的な分野の選択及び教員（講師）の採用
・地域の歴史や特徴に詳しい人材の確保
・海外の学校との交流をコーディネートできる人材・組織
・生徒と地域を結びつける発想力、企画力を備えた人材確保
・地域の企業や行政、大学等で活躍している外部人材を招いて授業ができるカリキュラムの設定
・柔軟な教員免許制度を県独自に設定して高校に地域が入れる場を開く

**（全国募集）**
・越県入学を希望する学生の対応
・他県から生徒を募集できる体制

**（学生寮）**
・全国募集とそれに応ずる宿舎の整備等受け入れ体制
・学生寮などの環境整備
・全寮制の高校
・寮を作り全寮制にするべき

**（設備・備品）**
・SDGs に基づき、クリーンエネルギー、CO2 削減などに配慮した校舎整備等
・長野県教育委員会がタブレット等生徒に貸与
・最新の技術にキャッチアップするための機器等の集中的な整備が必要

**（ＩＣＴ技術等の活用）**
・公共交通機関が乏しい地区においては、ICT を活用した遠隔授業の充実が必要
・校舎整備より、ICT 機器等の充実に係る経費の増額が必要
・人材の確保（オンラインを織り交ぜて遠隔でのカリキュラム作成には任用制度の明確化も課題）

**（生徒の確保）**
・特色ある学びを行うには生徒数を確保していく必要がある
・生徒の確保、進路先の確保

**【その他】**
**（生徒の意識）**
・生徒の意識の醸成
・今までの「高校での学び」のイメージからの脱却するための住民や保護者、生徒たちの意識改革

**（その他）**
・校長のリーダーシップによる学校マネジメント
・一クラスの生徒の人数の制限
・高校生の進路について、大学進学に係る入試制度改革との関係性も見逃せない
・「数値等目に見える部分」と「目には見えにくいが生徒の姿として充実している部分」の両面を成果として示していくこと
・大学進学率や就職率といった目の前の数値を問われる場合もある、社会で活躍できる人材に成長するための根っこづくりを大切にしていることを明確に示すこと
・地域のための人材育成となるようどのように変革するかが重要
・学習指導要領に沿って学習を行うことは重要だが、縛られると特色が失われてしまう可能性がある
・授業時間の確保（探究的学習は一定程度まとまった時間での実施が有効であると考える）
・英語力（話せる・聞ける）を高める必要がある

## ○　その他の意見

【高校について】

**（高校で育むべき力）**

・テストの点数のような目に見える面だけでなく、心の育ち（目に見えない面）も大切にしてほしい
・「乗り越える力」、「コミュニケーション力」が身につくよう指導してほしい

**（高校生への期待）**

・高校生の子どもたちが地域の一員として大人と一緒に取り組んでいく、そんな高校生の姿を願っています。「寄せ鍋」のような高校、地域を願っています
・生徒がワクワクしながら学びに向かい、自らの夢に挑戦する学びができることを願っています
・生徒が友達とのかかわりや学習・部活動などに具体的な目当てをもち、今日も登校してよかったと感じる高校生活を願う

**（学び）**

・学校が特色ある学びとして、生徒自己学習の時間を設け、個性を生かす授業があれば
・子供たちの将来を考えると、本気で子供たちが取り組みたいスポーツと、将来必ず役に立つ勉強を両立できる環境作りを学校側が本気で考えれば、魅力的な学校になると思います
・中学校で登校に苦しんだ生徒が高校生活を送れるようなゆるみのある教育課程の高校が、郡内に1校でも（1クラスでも）設置があれば、救われる生徒がいるのではないかと思います
・各学校にもっと裁量権を持たせ自由にカリキュラムを作れるようにしたほうが良い
・「信州検定」など子どもから大人まで信州を好きになる取組

**（高校選択）**

・偏差値により進学先を決定するケースが多いと思う。高校再編により進学できなくなる層が発生しないためのフォローが必要
・教育移住と言えばスポーツというイメージがあるが、県外から移住してまで入学しようと思う高校が県内に少ない印象
・高校に偏差値は必要。偏差値が同程度であれば、生徒が県立ではなく、進学に手厚い私学に行くことになるのではないか

**（情報発信）**

・大きな教育の転換点にあって、高等学校のあり様も大きく変わる必要があり、「特色ある県立高校づくり」を進めていることを、さらに広く深く浸透するようアピールしていただきたい
・ホームページやリーフレット等の活用による、児童生徒や保護者、市民や小中学校の関係者等への分かりやすい情報提供が必要
・学校の取組や成果等を外部（中学生・保護者・地域社会）に積極的に配信することが大事

**（通学）**

・遠距離通学、交通費負担が増えずに学びたいことを学べる場の整備
・公共交通機関であるバスの運行が課題。交通インフラも高校の問題として合わせて考えてほしい

**（地域との連携）**

・地域と連携した学びと情報発信を更に進め、高校と地域との結びつきを強くして欲しい

・地域との繋がりを大切にしていただきたい
・高校と地域、社会（産業、自然、住民、地域固有の行事や活動等）をどのように結びつけ、それを生かした教育を展開するのかの概要を示すことは必須
・職業科を有する高校は、地域と密着した教育活動を行っている現状があり、現在、県で配置している地域連携コーディネーターを増員し、職業科の全高校に配置したい
・地域と学校が同時に輝くことが重要と思います
・地域連携は、自治体としても積極的に協力したいが、県としてコーディネーターなどの人材や資源を希望する全高校に投入する必要がある
・毎年、町から高校の期成同盟会に整備費を支出しているが、今後も魅力ある県立高校を目指していただきたく、同様の支援をしていきたい
・市も高校生の通学の利便性を高める施策を行うなど、双方にとって益のある方策をいろいろと展開したいと考えているので、今後も市と高校との一層の連携、協力を期待する

**（他機関との連携）**
・小中高を通したキャリア教育の必要性を感じる
・人事交流としての中高交流だけでなく、週間単位や月単位の短期の教員交流を行い、中高の連携を深めたい
・学校間を超えた学びの広がりがほしい
・大学進学で大都市圏を選ばざるを得ない状況があるとすれば、県内大学と更に連携し、高大接続を積極的に進めることやサテライトキャンパスの誘致などの施策を考える必要があるのでは
・高校にとっても市町村（教育委員会）にとっても、これまで以上に情報共有や連携が必要

**（施設整備）**
・容易にはいかないことは承知の上ですが、校舎の新築、改築が県立高校の場合は特に必要
・通学している生徒や近々進学する生徒が恩恵を受けられるような施設設備の改良をお願いしたい
・学校施設が古い。雪国の高校がいまだに教室が寒いのはいかがなものか。またトイレの問題は特に女子生徒には大きなポイント

**【少子化への対応】**
**（流出への対応）**
・高校を卒業すると、大学へ進学するときに人材が外部へ流出してしまう。高校３年間にさらに２年追加し高専のようにして、集中した学びを提供し、地元に残る人材を育成してはどうか
・ふるさとの地域産業・環境・文化・歴史を深く学び、都市部の大学に進学したとしても、ふるさとに帰り、地域産業や景観を守っていくような人材育成となる流れになればよいと感じる

**（中山間地存立校への配慮）**
・「中山間地存立校」の再編に関する基準は県境に近い地域で近隣の高校と著しく離れている高校は、当該基準の対象外とするか若しくは人数要件の緩和等の見直しをお願いします
・山間へき地などに居住する地域の特性上、自宅から高校までの距離も遠く、自宅での自主学習しか選択肢がない生徒に対しては、ICT を活用し、教育格差がなくなるよう配慮をお願いします
・高校をどこに置くかは、シティプロモーションに直結した問題であり、教育委員会だけでなく地域振興局が中心となって考えていくべき

**【その他】**

**（特色化にあたって）**

・移住選択の際に、高校に魅力が少ないという声は度々仄聞するので、難関校への進学サポートへの期待もあるが、私立の通信制を選択する生徒が急増している背景なども分析する必要がある

・「未来の学校構築事業実践校」の特色ある取組や通信制の改革、サテライト校の設置、国指定のＳＳＨ、ＷＷＬ、経産省モデル事業などを承知した上で、新たな視点といった観点でも進めるべき

・様々な方策の検討を産業界・小中学校・行政との意見交換をしながら進めていることに敬意を表しますが、目先の改革に終わらないように長いスパンでの視野で進めていただければと思います

・可能ならば制度設計に当たっては、もう少し生徒を中心に当事者たちの声を拾ってみては

・高校のあり方を検討するにあたり、高校中退者の事例からも検討すべき

・学校の特色や魅力を追求する際に、生徒の職業選択の幅を狭めることのないように注意してほしい

・例えば自然を活かした教育、海外等との交流事、地域の活性化に寄与する活動など、生徒の視野や思考を広げるような活動で特色や魅力をつくることができないかと思う

・序列化の弊害をどう無くすか。「どうせ・・」意識をどの学校の生徒からも排除し、自身の学校に誇りを持てる高校の設立、一つ一つの高校の明確な育成方針、コンセプト、意義が望まれる

**（その他）**

・旧第５通学区については現状大きな問題もないと感じる

・特色化、魅力化を進める中で、現場の教職員は対応可能なのか

・多様な変革を成し遂げてきた高校教育が更にまた挑戦を続けていく姿勢にエールを送りたい

・改革は入る側の生徒が変化している現在、受け入れる側の変化ができなければ困難

・高校入試制度を抜本的に変えるべきと考える。進学校は学校ごと入試方法を考案し実施し、志願倍率が１未満の高校は一律の学力試験をやめるなど

・県立高校定時制（夜間部）附属校という位置づけで、夜間中学校を開校できないか

・教師が一年間でも民間の会社で働くようなシステムの構築を。

・公立の通信制の配置を考慮されたい（県下４地区）

# 高校再編に関する考え方及び基準等について

## ○立地の特性を活かした高校づくりについて

・中山間地が多く、県土が広い本県の地理的特性を考えると、市街地にも中山間地にも高校が存立し、それぞれの高校の特長を活かして「新たな社会を創造する力」を育めることが望ましい姿と考える。
・市街地にある高校は、規模の大きさを活かした学校づくりをとおして、切磋琢磨しながら「新たな社会を創造する力」を育むことができると考える。
・中山間地を中心に存立している高校は、小規模ならではの利点を活かし、生徒一人ひとりに目が届きやすく、きめ細やかな支援を行うことができる。また、地域との連携を活かした教育活動を行い、地域の担い手を育成する等、地方創生、地域活性化の観点からも重要な役割を果たしている。
・このような立地の特性を活かした高校づくりを進めるために、「都市部存立校」と「中山間地存立校」という考え方を導入し、それぞれに異なる再編に関する基準を設ける。
・県境に近い地域で、その学校がなくなった場合には、他県の高校に行かざるを得ない状況を極力避けるために、「中山間地存立特定校」の考え方も設ける。

## ○「都市部存立校」と「中山間地存立校」の考え方

ア　市街地に位置し、地理的条件から学校群として一体的に将来像を検討することが望ましい全日制高校を「都市部存立校」とする。そのうち、普通高校（総合学科高校、普通科の割合が半数以上の普職併設校を含む）を「都市部存立普通校」とし、職業教育を主とする専門高校（普通科の割合が半数未満の普職併設校を含む）を「都市部存立専門校」とする。

イ　上記アの条件を満たさない全日制高校を「中山間地存立校」とし、そのうち、所在地等において特別の事情のある高校を「中山間地存立特定校」とする。

### （参考）　「都市部存立校」と「中山間地存立校」について

2022 年（令和４年）５月１日現在

| 通学区 | 旧 12 通学区 | 都市部存立校 | | 中山間地存立校 |
|---|---|---|---|---|
| | | 都市部存立普通校 | 都市部存立専門校 | |
| 1 | 1 | | | 飯山　下高井農林 |
| | 2 | 中野立志館　中野西<br>須坂東　須坂 | 須坂創成 | |
| | 3 | 長野吉田　長野<br>長野西　長野東 | 長野商業　長野工業 | 北部 |
| | 4 | 長野南　篠ノ井<br>屋代　屋代南 | 更級農業　松代 | 坂城 |
| 2 | 5 | 上田　上田染谷丘　上田東 | 上田千曲 | 丸子修学館 |
| | 6 | 小諸　岩村田<br>野沢北　野沢南 | 小諸商業<br>佐久平総合技術 | 蓼科　軽井沢<br>小海 |
| 3 | 7 | 諏訪清陵　諏訪二葉<br>下諏訪向陽　岡谷東　岡谷南 | 諏訪実業　岡谷工業 | 富士見　茅野 |
| | 8 | 伊那北　伊那弥生ケ丘　赤穂 | 上伊那農業　駒ケ根工業 | 辰野　高遠 |
| | 9 | 飯田　飯田風越 | 飯田 OIDE 長姫　下伊那農業 | 松川　阿智　阿南 |
| 4 | 10 | | | 蘇南　木曽青峰 |
| | 11 | 塩尻志学館　田川　豊科<br>松本県ケ丘　松本蟻ケ崎<br>松本深志　松本美須々ケ丘 | 松本工業　南安曇農業<br>穂高商業 | 梓川　明科 |
| | 12 | | | 池田工業<br>大町岳陽　白馬 |

注）「都市部存立校」と「中山間地存立校」の考え方は、全日制高等学校を対象としており、多部制・単位制及び定時制高等学校は含まれていない。

## ○再編に関する基準等について

### １「都市部存立普通校」の基準について

○募集定員 240 人以上が望ましく、さらに規模の大きさを活かせる募集定員 320 人規模の学校の設置も目指す。
○規模が縮小し、在籍生徒数が 520 人以下の状態が２年連続した場合には、再編対象として、①他校との統合（新たな高校をつくる）、②募集停止のいずれかの方策をとる。

### ２「都市部存立専門校」の基準について

○募集定員 120 人以上が望ましい。
○規模が縮小し、在籍生徒数が 280 人以下の状態が２年連続した場合には、再編対象として、①他校との統合（新たな高校をつくる）、②募集停止のいずれかの方策をとる。

### ３「中山間地存立校」の基準について

○募集定員 120 人以上が望ましい。
○在籍生徒数が 120 人以下の状態、もしくは、在籍生徒数が 160 人以下かつ卒業生の半数以上が当該高校へ入学している中学校がない状態が２年連続した場合には、再編対象として、①他校との統合（新たな高校をつくる）、②地域キャンパス化（分校化）、③「中山間地存立特定校」の指定、④募集停止のいずれかの方策をとる。

### ４「中山間地存立特定校」の基準について

○地域との協働を「中山間地存立校」を適用した学校よりもさらに強化することにより、募集定員 40 人でも単独で高校を存続させる道を探る。
○次の条件をすべて満たす高校は「中山間地存立校」の基準に該当した場合であっても、その例外として「中山間地存立特定校」としての指定を検討する。
（ア）県境に近い地域で、近隣の高校と著しく離れている。
（イ）教育機会の確保の観点から高校の存続の必要性が高いと判断できる。
（ウ）所在する市町村等、地域からの支援を得ながら、高校を単独で存続する体制を整備できる。

### ５「地域キャンパス」及び「中山間地存立特定校」がより小規模になった場合について

○在籍生徒数が 60 人以下の状態が２年連続した場合には、募集停止を検討する。ただし、卒業生の半数以上が当該高校へ入学している中学校がある場合や、将来、入学者の増加が予測される場合は慎重に扱う。なお、在籍生徒数は、地域キャンパス化から３年が経過、もしくは「中山間地存立特定校」の指定から３年が経過した時点以降の生徒数とする。

注１）再編に関する基準等については、令和５年度を初年度として適用する。

注２）この基準の「在籍生徒数」は、学校基本調査に基づく５月１日現在の数とする。